

特別
290

No 6690

胡適之先生遺著
論評附
全

論評附
全

Twothouk
Cheaikcan
Thushowton

著世蓋山杉

版藏屋京東



和漢古戰智將奇計鑑自序

兵に智戰あり勇戰あり器戰あり此の三ツのもの備はれば
百戰百勝敢て一敗なし其所謂智戰とは孔明、楠、具田が如き
謀計を運らして戰ふものを云ひ其所謂勇戰とは項羽、拿破
崙が如き猛虎の勢ひをなし勇を揮て戰ふものを云ひ其所
謂器戰とは方今英佛獨魯の如き整良堅固ある器械の力に
頼りて整々堂々の戦ひを爲すものを云ふ今日は道德世界
にあらずして腕力世界なり故に今日の社會に當て講武を
忌む者あらず其國家亡ぶ其國家亡ぶれば其人亦世に立つ
能はず兵は元來凶器にして戰ひと危事なれど今日の腕力
世界にありて武を講ずると實に已むを得ざることなり且

つ聞く天下安しと雖も戦ひを忘るときは以て危しと況して今日は太平の觀を呈し我れは事あかれかしと祈るも由斯大敵鷹や豕或の鷄の爪を磨ぎて俄に横合より突き直らんも亦測るべからず其時に當て我が一身の上の事あれば君子は危きふ近寄らず先づ逃るが勝ちだよ家康様と出掛くれども其こが一國の上に於ては獨立の體面を汚穢すの耻辱とやらで之を全ふせねばならぬこと故斯る譯けふも参らず蘇秦張儀の談判をなし鐵相整はで袖を拂て歸り來らば是非一合戰率餘倉と云はれ奇正子の如れも未だ四十の坂を越へねば三寸の筆を抛て三尺の劍を換へて戰場に出掛け給はるるぬるとあり然れを平時ふありて武を講ずることば國民たるもの、義務と云ふも亦可なり而して

兵器ハ理化學の進歩と財政の力之を助くれバ益々盛良堅固に赴くべく又勇力の天然の儘にて之を如何ともすべからざるが如しと雖も軍創は以て勇力を増すの術にして此の二ツハ世人既ふ之を講じて怠らざるもの、如し然るも智の上つふ至ては世取て之を講ずる者なきもの、如し嗚呼武人腕力あるが故ふ貴しとせず謀略あるを以て貴しとす劍は一人の敵のみ智ハ萬人に敵を然るふ其一人に敵れるものハ之を學ぶ者ありて其萬人に敵るものハ之を學ぶ者なれば實に慨歎の至りあり今日ハ文學盛にして實験に怠らざれば他の智を日々夜々に進歩して殆んど其底止る所なしと雖も兵智ハ自ら他の智と異にし他の智に富むを兵智ふ乏しき者あれば今にありて兵智を講ずる

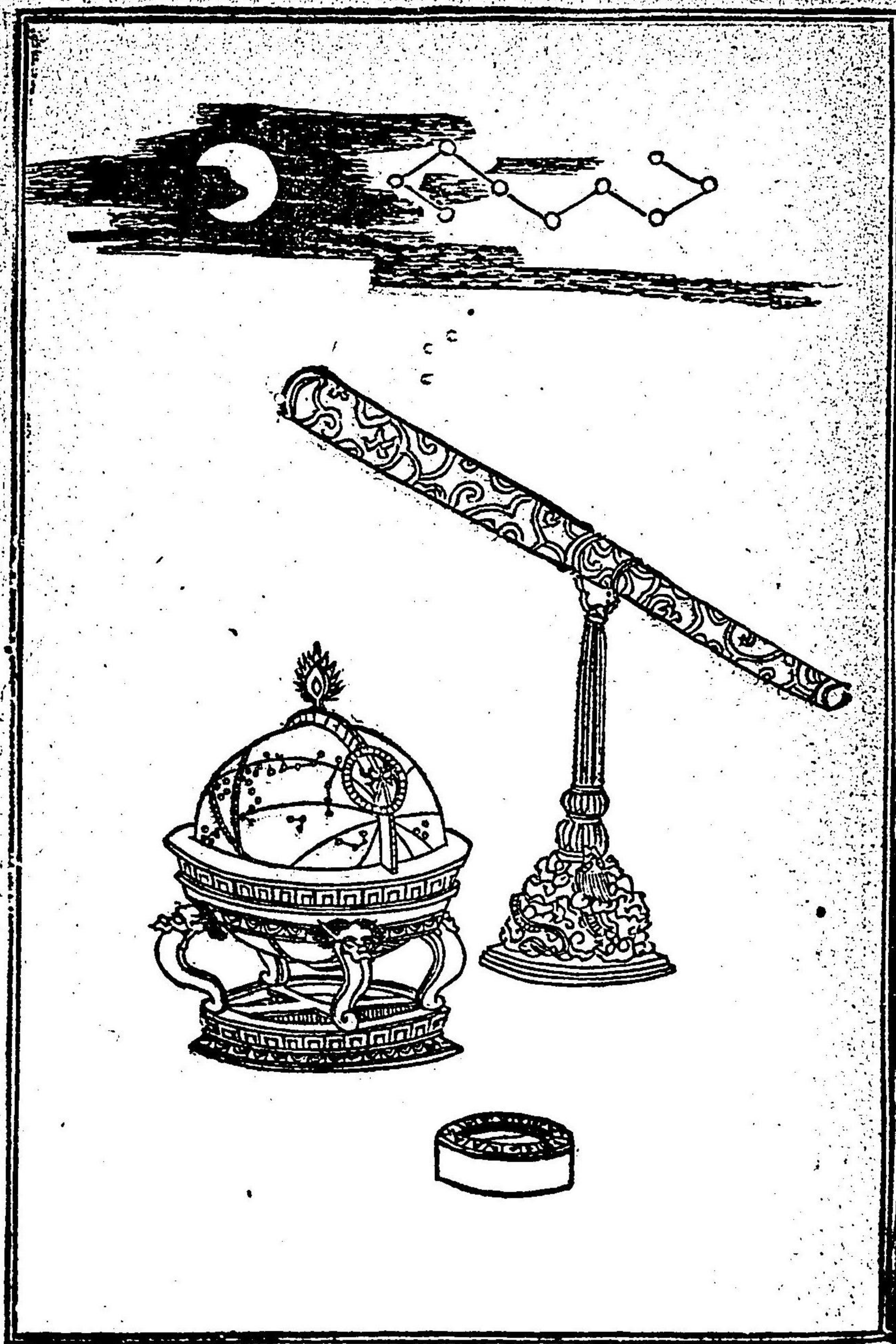
と今日の急務あり然れば之を如何ふして講ずべきか六韜
 三略孫吳が如き兵書ハ即ち其一ツなりと雖も書は素と
 死物にして戦争は活物なり故に書ハ活動の變化なく又細
 状を盡くさず且つ夫れ太公張良孫武吳起が輩戰場に臨ん
 で實地演習したる後ち彼の兵書を編みしにはあらで其兵
 書を著せ去後ちふこそ戰場に臨みしものなご故に彼の書
 に因て武を講ずるハ未ぶ以て足れりとするべからず況して
 彼の人々の三國天正の頃の烈しき戰場の様を見聞せぬ者
 なれば未だ思ひ足らぬ所往々ふありて存するふとなれば
 必き他に之を講ずるの道を求めざるべからず即ち古來の
 戦争中奇計を以て敵を破りし例數多取集免之を熟讀玩味
 すれば奇計變化の妙自ら其熟所より出て來りて兵智の演

習講武の術之れが爲先に進歩すること疑ひなま彼の文章
 家ハ皆先づ古文を熟讀玩味するを以て習文の法とを故に
 文章小巧なる者に去て古文を熟讀玩味せぬ者ハあらじ然
 れバ兵智を増さんとする者は必ず先づ古戦智將の奇計を
 熟讀玩味せざるべからず抑も廣く内外の戦記を見れば奇
 計自ら其中ありと雖ども古來の戦書多く晝夜之を事と
 して閱覽するも尙る且つ幾多の星霜を費やさるを得ず
 人各々職業あり固より以て晝夜之を事とをること能はず
 且つ夫れ玉石混交奇計九略錯雜みあれば其奇計を分拆け
 ること能はず凡略を見ざる眼にて讀み知らる奇計のあ
 る所を看過去て其感起さるふとあるべし是を以て奇
 正子廣く古來の戦書中奇中の奇妙中の妙奇々妙々實に驚

くよくよく感ずべき殊計を數多編纂して明の奇正子の評論と
附を著し是を以て兵智を増すの一助となるものば幸甚

明治十九年十二月

奇正子編しぬ







和漢古戦智將奇計鑑目錄

○緒論

○前編 日本

◎第一章 源義家

○義家、鴈行の亂る、を見て伏あるを知り却て敵を

討ち

◎第二章 木曾義仲

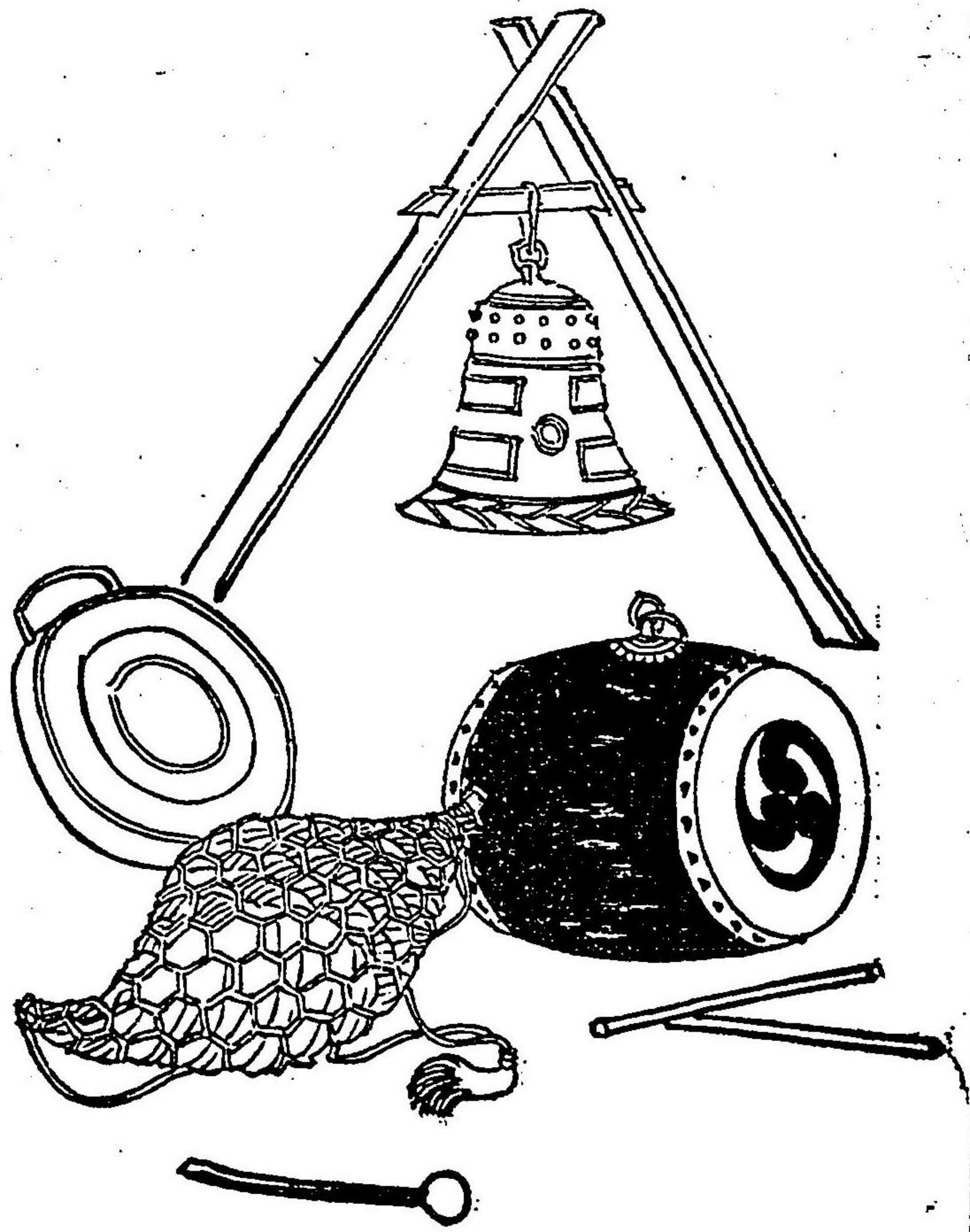
○義仲、奇計平軍を欺く

◎第三章 源義經

○義經、暴風雨を伺して敵軍を破る

◎第四章 佐々木盛綱

○盛綱、敵の反を計て鳥坂城を抜く



- ◎第五章 捕正成
 - 正成、奇計敵城を乗取る
 - 正成、泣男を用ひて大敵軍を破る
- ◎第六章 新田義貞
 - 義貞、託神の謀計を以て兵氣を鼓舞す
 - 義貞、奇計敵をして同士討せしむ
- ◎第七章 浦生貞秀
 - 貞秀、氷を以て水多きの體を見すの計を
- ◎第八章 武田信玄
 - 信玄、敵將の氣質を聞て奇計を運らす
- ◎第九章 上杉謙信
 - 景虎、寝て時機を待つ

- 謙信、敵の反を計て其不意を襲ふ
- ◎第十章 山本晴幸
 - 晴幸、磁石謀計を以て村上勢の備立を襲ふ
- ◎第十一章 具田昌幸
 - 昌幸、地雷火を避けて大敵を破る
 - 昌幸、虚實變化の謀計を以て大口北條勢を破る
- ◎第十二章 織田信長
 - 信長、偽り死して危難を遁る
- ◎第十三章 柴田勝家
 - 勝家、水瓶を破壊して大敵寄手を破る
- ◎第十四章 鈴木重幸
 - 重幸、稻荷陣

- 重幸、敵に計せしと見せて其實却て敵を計し妙計
- 重幸、兵糧を獻すと詐りて信長の陣屋を焼討す
- 重幸、奇謀を運らして毛利家より兵糧を借る
- 第十五章 豊臣秀吉
 - 秀吉、義元の氣質を推して謀計を設く
 - 秀吉、奇計を運らして箕作城を抜く
 - 秀吉、殿疑兵の謀計を以て大に朝倉勢を破る
 - 秀吉、奇計を以て鯉江城を襲取る
- 第十六章 小早川隆景
 - 隆景、背備を以て大に明軍を破る
- 第十七章 加藤清正
 - 清正、敵の反を計て城を乗取る

- 第十八章 加藤嘉明
 - 嘉明、奇計を施えて敵船を乗取る
- 第十九章 大谷吉隆
 - 慶松、偽計を以て勝家を欺く
- 第二十章 後藤基次
 - 基次、輜輳車を用ひて晋州城を抜く
- 第二十一章 真田幸村
 - 幸村、鶏卵の謀計を以て大に奇手を破る
 - 幸村、火攻を以て大に奇手を破る
 - 幸村、敵の心を推し投げ松明の謀計を以て大に奇手を破る
 - 幸村、敵の反を計て大に之を破る

- 重幸、敵に計せしと見せて其實却て敵を討し妙計
- 重幸、兵糧を獻すと詐りて信長の陣屋を焼討す
- 重幸、奇謀を運らして毛利家より兵糧を借る
- 第十五章 豊臣秀吉
 - 秀吉、義元の氣質を推して謀計を抜く
 - 秀吉、奇計を運らして突作城を抜く
 - 秀吉、敵兵の謀計を以て大に利倉勢を破る
 - 秀吉、奇計を以て能登城を破る
- 第十六章 小早川隆景
 - 隆景、奇術を以て大に明軍を破る
- 第十七章 加藤清正
 - 清正、敵の反を討て城を奪取る

- 第十八章 加藤嘉明
 - 嘉明、奇計を施えて敵船を奪取る
- 第十九章 大谷吉隆
 - 慶松、偽計を以て勝家を破る
- 第二十章 後藤基次
 - 基次、輜輳車を用ひて晋州城を抜く
- 第二十一章 具田幸村
 - 幸村、鶏卵の謀計を以て大に奇手を破る
 - 幸村、火攻を以て大に奇手を破る
 - 幸村、敵の心を推し投げ松明の謀計を以て大に奇手を破る
 - 幸村、敵の反を計て大に之を破る

- 幸村、竹皮熱粥の謀計を以て大に寄手を破る
- 幸村、稻苅陣
- 幸村、一時反間の謀計を用ひて大に敵軍を破る
- ◎第二十二章 徳川家康
 - 家康彼れに向ふの體を見えて此れに入る
 - 家康戦はずし人ての兵を屈す
- ◎後編 支那
- ◎第一章 孫臏
 - 孫臏、減籠増兵の詭計を以て龐涓を討つ
- ◎第二章 田單
 - 田單、火牛の謀計を以て大に齊手を破る
- ◎第三章 錢傳璫

- 錢傳璫、灰と豆と火を以て大に吳軍を破る
- ◎第四章 韓信
 - 韓信、背水の陣を以て趙を破る
 - 韓信、囊沙の謀計を以て龍沮を討つ
- ◎第四章 陣平
 - 陣平、反間の謀計を以て范增を排く
 - 陣平、木像の謀計を以て曹嶮の圍を解く
- ◎第五章 李確
 - 李確、金進鼓退の變法を以て呂布を破る
- ◎第六章 曹操
 - 曹操、呂布が心を推して大に之を破る
 - 曹操、兵卒の怨を避く

- 曹操、水馬を用ひず一言を以て兵士の渴を止む
- ◎七章 賈詡
 - 賈詡、曹操が反を計て大に之を破る
 - 賈詡、初度の追討を止免て再度の追討を勸む
- ◎第八章 玄德
 - 玄德、耕畑驚雷の詭計を以て曹操を欺く
- ◎第九章 周瑜
 - 周瑜、反問の謀計を以て蔡瑁、張允を除く
- ◎十章 孔明
 - 孔明、一夜ふ十萬の矢を得
 - 孔明、曹操の反を計て關羽、小義を爲さしむ
 - 孔明、木獸を以て眞獸を走らす

- 孔明、曹兵が反を計て大に之を破る
- 孔明、無謀の計畧を以て仲達を走らす
- 孔明、敵の謀計を一轉して我が謀計とす
- 孔明、竈城の古法を一轉し竈増の反法を以て司馬懿を走らす
- 孔明、神師の謀計を以て大に魏の勢を破る
- 死せる孔明生ける仲達を走らす
- ◎第十一章 司馬懿
 - 司馬懿、敗軍の際甲を束ふ落して西に走る
- ◎第十二章 張巡
 - 張巡、蕪人形の謀計を以て大に寄手を破る
- ◎第十三章 狄青
 - 狄青、託神の謀計を以て味方の兵氣を鼓舞す

◎第十四章 岳飛

○岳飛奇計大に金兵を破る

○岳飛奇計曹成を破る

○岳飛揚欽を詐り打擲て高老虎を擒ふ

○岳飛速智敵船を破る

◎第十五章 劉琦

○劉琦豆蔲の謀計を以て大に敵軍を破る

◎第十六章 王德

○王德敵の放ち火牛を追返して大に敵軍を破る

◎第十七章 趙鬪

○趙鬪猿猴を放て敵城を火を掛く

○結論

和漢古戦 智將奇計鑑 目錄終

和漢古戦 智將奇計鑑

凡例

一本書は講武の一助に供せんが爲め和漢の古戦中奇計を編撰したるものなり而して奇計と云ふ少數種あれども今本書に採取する所のものは敵將の氣質を察し地形により時勢によりて謀計を運らすものに止まりて彼の敵人を擒にしたるによりて敵の企たる謀計を知り却て其反を計るもの或は籌策を帷帳の中より運して勝つことを千里の外より決する等のもの之を採取せし何や敵人を擒にしたるより計れるものは其謀計奇妙と雖も其謀計を爲す所以の者遇然なれば之を奇妙と爲るに足らず實に時の僥倖あり又籌策を帷帳の中に運らすもの

は餘り大謀に過ぎて面白み薄く従て小説牌史の本體を失はるの恐れあるを以てあり

一本書は敵人の氣質を察し地形により時勢ふよりて謀計を運ぶそのものを採取すと雖も獨り勝軍を奏せしものゝを配するにあらず敗軍の士も亦其敗中に奇計を運らして身を全ふしたる者は間々亦之を配す但し謀計を企つと雖も其事遂に成るぬものは一切之を配さず又謀計を企てゝ其事能く圖に當ると雖も古人の既に用ぬし謀計を少しも變へし所なく其儘用ひしものは之を配さず懸れ同計を再び用うるは奇にあらざるを以てなり然も若し後ちあるも稍々前へなるものを變更して其奇を増すに於ては却て其後計を配して前策を略しぬ尤

も評論中に其同一謀計を施せる事の始末の略を配せり

一本書は奇中の奇妙中の妙奇々妙々實に驚くべく感ずべき計謀を精撰するを以て旨とするが故に凡略にして凡將の風々用ふる所のもの即ち豫免伏勢を置き詐り取して敵を帯び出し敵勝に乗て追來る所を其伏勢を出して前後より狭討んとするが凡略の一切之を編入せず故に讀者或て某氏は何の役も如何なる謀計あり然るも今本書之を欠くと思惟するものあるべしと雖も此の如きもの多くの編者に於て之を凡略取て取るに足らずとしたりるものと知られたる

一本書は奇中の奇妙中の妙なる謀計と大概之を採取しつゝりと雖も和漢古戦の多き謀計固よと此に盡さず

は餘り大謀に過ぎて面白み薄く從て小説牌史の本體を失はるの恐れあるを以てあり

一本書は敵人の氣質を察し地形により時勢ふよりて謀計を運ぶるものを採取すと雖も獨り勝軍を奏せしものゝを記するにあらず敗軍の士も亦其敗中に奇計を運らして身を全ふしたる者は間々亦之を記す但し謀計を企つと雖も其事遂に成らぬものは一切之を記さず又謀計を企てゝ其事能く圖に當ると雖も古人の既に用ぬし謀計を少しも變へし所なく其徳用ゐるものは之を記さず是れ同計を再び用うるは奇にあらざるを以てなり然ぞ若し後らあるも稍々前へなるものを變更して其奇を増すに於ては却て其後計を記して前策を略しぬ尤

も評論中に其同一謀計を施せる事の始末の略を記せり

一本書と奇中の奇、妙中の妙、奇々妙々實に驚くべく感すべき計謀を精撰するを以て旨とするが故に凡略ふして凡將の屢々用ふる所のもの即ち豫先伏勢を置き詐り敗して敵を帯死出し敵勝に乗て追來る所を其伏勢を出して前後より狭討んとするが凡略の一切之を編入せず故小讀者或は某氏は何の役小如何ある謀計あり然るも今本書之を欠くと思惟するものあるべしと雖も此の如きもの多くの編者に於て之を凡略敢て取るに足らずとしたるものと知られたる

一本書は奇中の奇、妙中の妙なる謀計と大概之を採取しとりと雖も和漢古戦の多き奇謀妙計固よと此に盡さざ

るべし然れど先づ其大概の採取あたりと信ずれる兵器を學ぶの一助ともなりぬらんか尤も本書は小説稗史に據りて正史に據らぬことなれば小説稗史にならぬものは往々零に從へり夫れ正史の多く綱を記して目を配さず然るに小説稗史の綱目小大敢て遺漏さず奇計感すべきものは多く目にありて綱ふあらず是れ本書の小説稗史に據りて正史に據らぬ所以なり

一本書の固く和、漢、歐、米の奇謀妙計を網羅せんといつるなれど本書の據る所の固く小説稗史にあり然るに歐、米の戦記の之を小説稗史の體裁に書しもの少なく加ふるに歐、米の戦争の整々堂々器械の闘ひにして苟も器械整其堅固あれば則ち勝ち否とされば則ち敗すと云ふにあ

りて歴山王、拿破崙の如き勇猛の將の往々に見るあるも孔明、真田の如き奇々妙々の謀計を運らして敵を破りしと云ふことは殆んど稀れなり故ふ本書歐米を畧して専ら和、漢の奇計を採取せ

一東洋諸邦理化學の輸入其日尙は淺く從來在り觸れたる小説稗史の類と皆其理化の學未だ開けぬ先き小編まれざるものあれば荒唐無稽率強附會鬼神不思議の説往々にありて殆んど見るに堪へざるもの多し今本書と此の如きもの一も採取せず故に其謀計奇妙なりと雖ども其事鬼神不思議の説少くするものは皆之を畧す但し其鬼神不思議の説枝葉にして少しなるもの其部分の之を削りて前後の關係を程能く繋ぎ合はしより其他文章の軍

士の心を酌み敵の情を推し地形及び時勢を察して其謀計の關係を明ららしめんが爲め往々之を書り改めたる所あり

一本書の固より小説牌吏のよと故傍訓を施すと雖ども又本書を見んと思ひ立つ位の者は固より以て日に文字ある者あれも其傍訓は唯難字に止めて平常の文字を皆之を畧せぬ又其難字と雖ども始めの一個小傍訓を施せも其一文同一文字の傍訓を略す

一太公孫武吳起張良の兵家の宗として崇る者なれも本書編撰の際該子の謀計を編入せんとしつれども彼の者等の兵論小長ずるを實地戰場に臨んでの番計と稱する程のものあるなきもの、如し否も全くなきにあらざるべ

きも所謂籌策を帷帳の中に運きて勝つことを千里の遠き小決するものにして本書編纂の旨趣に異なるものあり故に之を編入せず又九郎義經山本晴幸等の如き軍師なりと其名高けれども是れも亦奇計と稱するに足るものあるなきもの、如し然れど右等の者ハ我朝の人に於て小兒婦女子小至るまで其名を知りつる者あれど之を除んも或は讀者の希望に背馳くの恐れなき能はず故に其心を酌み敵の情を推し地形及び時勢を察して其謀計の深き所を顯し以て之を編入せり

一後篇支那條下の里程は彼の國の六丁一里に従ふものなり故に支那の里程は六里を以て我が日本の一里と若き之を服膺せずして見る時ハ頗る里數の長きに疑ひを

起ることもあるべし能く心得べし但し豊臣朝鮮征討の役
中往々採取またるものありしが道は事日、韓兩國に關を
るふとなれば其里程も彼此一定せず故に一々其別を記
せり

一本書は和漢の智將數十人の奇計を編纂したるものなれ
ば前編に於ては獨り具田幸村のち後編ふ於ては獨り諸
葛孔明のみ其本計を記するに先ちて評論を附したるも
のハ編纂の體裁不規則あるに似たりと雖ども是れにハ
抑も故あり何ぞや漢土で孔明、日本で具田ハ智將中の最
も智將なる者にして他諸子と遙に其度を異ふし奇謀妙
計甚だ多くして且つ皆驚くべく感すべきものならざる
はなし故ふ余ハ漢土で孔明、日本で補と云へる古言を換

へて漢土で孔明、日本で具田となし以て該二子ハ限り之
れが評論を附せるなり

一軍書往々金鼓天に喧しく地を動かして進み來ると云ふ
ことあり其文勢の活潑なる宛然机上の書、動き出して眞
の戰場を觀るが如き者ありて甚だ愛すべきが如しと雖
ども退て深く之を實考するふ鼓ハ進軍の器ふして金は
退軍の具あり然るを如何ふ文勢を附くれむとてその進
軍の器と退軍の具を一時に鳴らして進み來る或ハ進
行くなご、書だ立つるハ虚筆も亦太甚しと云ふべし故
に余と此の如き所を書くに皆鼓の一字若くハ金字に換
ふるに貝字或ハ鏜字をもつてす讀者或ハ文勢の弱きふ
不快を覺ふべしといへども余と軍談師にあらねを見て

来たやうな虚筆を書かぬをもつて旨とす讀者よろしく
察すべし

凡例終

和漢古戰智將奇計鑑 附評論

杉山奇正編撰



此世は 海外世界にして未だ十年の書を見ずして早く既に
身を起して天下の 政道を談論して能く其理ふ適ふ者あり然
るに終身眼を 書ふ晒し白髪尙ほ事理を悟らば所謂飯食字
引にして終る者 あり其要唯書を見て活用せると否などに
あり今本書を見る 者も亦活眼を以て之を活讀して能く活
用せば其變化の 妙神に至るべしと雖ども若し或は死眼を
以て死讀し活用 することを知らざれば却て其害を招くこ
とあるべし尤も 唯慰みの爲め之を見るふに敢て其害なし

と雖ども至は亦編者の責任大略其活用の方法を述べたんとす抑も同一謀計を再び用ふるは奇ふあらず實に奇をらざるのまならず敵既に其手術を知るが故に却て其反を計らるべし況して古と今との其時を異にし戦情同じからぬ此點亦注意せざるべからず然れども彼れを知り我れを知るは兵家の必訣にして先づ彼れが人と爲りを探り果して凡將なるまを知らむ此書の謀計を其儘用ふることを得ん若し時と場合の異なるありて直ちに之を用ふべからざるあれバ其計を用ふべきの手術を爲すは自家の考へたるべし然し其位の計ひは此書を見たるの功ふより考へ得らるべし敵將若し智あまて能く兵法に通じ古戦に明かあることを知らば多く古例の反ふ出るを要す又敵將の人と

爲り如何によりては其反の反を計りて其元に歸りて古例の儘を用ひざるべからざることあり是れを之れ活用とは云ふなり此事以て此書を見れを兵智益々加はりて孔明、眞田を一ツふしたる謀士となるべきこと亦疑ひなし豈と亦愉快ことならずや論者或て云ふらん稗史と固より眞偽相半するものあれば書中の謀計、奇は則ち奇妙は則ち妙ありとも其事俄に以て信すべからずと其れ然り然りと雖ども正史必ずしも信すべからず稗史必ずして信すべからざるにあらず凡そ史の實を知り難きは其身當時にありて當時の事を見聞するも尙ほ且つ疑惑ありて其事一説にて何々と云ひ又一説には云々と云ひ孰れか其眞偽を判すべからざるは世事の常態ありまして其世代を異にするものに於

ては其實を採知ること殆んど難きは正史稗史共に一あり
 何んぞ正史と稗史との間に就て信不信の別あらんや此書
 或は十中一の信すべからざるものあらんと雖も之れが
 爲め此書の編纂不可ありとせむ天下遂に史を絶ん是れ豈
 に社會の本意あらんや況して偶さか虚あるも其事皆奇計
 にして兵家の参考と爲すに足り其裨益少なからねば其手
 術の旨趣を採りて其虚を捨てて何の妨げあらん必ず
 其見る目は樂ましむべくして且つ又其利を受くること其
 實事と敢て異なる事なかるべし然れども余は軍談士にあ
 らねを見て來たやうな虚言を書かず成るべくと信すべき
 所ふ據りて其信すべからざる所を避けられば讀者も亦他
 の史よりは幾分の信を置かれたきことにあん

○前編 日本

◎第一章 源義家

○義家、雁行の亂る、を見て伏あるを知り却て
 敵を討る

義家、奥羽征討の役、武衡家衡の二將、金澤柵に據ると聞、頃
 の寛治元年九月、自、數萬騎に將として、數百の旌旗、秋風に
 遍翻と靡し、益々進んで柵を去る數里、此方まで行きし所、穴
 訝しやな前路、ふ當て數百千の雁、其行ひを亂して、飛び散り
 なるよぞ、義家早々先鋒の勢と止め、全軍を二ツに分れて、前
 陣後陣と爲し、前陣を誑て曰く、前路、ふ當て蘆茅の繁茂りし
 處あり、彼處より、必ず伏勢起らん、然れど氣の付かざる體
 にて進み、其伏勢起るべ速のふ取て返へ、去て攻討べし、我れ

又後陣を進めて之を狹討んと其旨を領えて前陣進みて彼の蘆茅の處に至り如何ふも氣の付かざる體を見しと過ぐるに其勢殆んど皆行き去らんとする所忽然として太鼓を打ち鳴らし貝を吹き立て唳と鯨波を作りて討て蒐るに不意期をたるとなれ必俄に備へを立直して戦ぬ間も荒々の後陣進み來りて前後より攻め立てたるふ予不意を討んとしたる奥羽勢却て不意を討れ前後に度を失ふ途に盛ふぞ爲りよける合戦終りて部將義家に對ひ將軍何とて敵の伏勢を知りつるぞと問ひしに義家答ひけるは兵法小云ふ鳥の亂る、と伏なりと先き小雁行の亂るは即ち是れなり思ふに鳥の性たる物に驚き易きものなれ下の人に在る有れば必ず其行ひを亂すべし我が伏勢あるを知り

さるも亦是れが爲めなりと聞て皆感じ合へにけり

奇正子曰く兵書に稱き鳥散ると伏なり鳥集るは虚なりと假令人見ぬずとを鳥散らば伏ありと知るべし是れ人に驚て散りしものかればなり又假令人ありとも鳥集らば人形と知るべし是れ人にはあらで人形なるを得て鳥驚かずして集りしものかればなり其虚實を知るの術現ありと云ふべし義家能く兵法に通ず故に雁行の亂る、を望見て敵の伏せあることを知り却て其反を討しなり

◎第二章 木曾義仲

○義仲奇計平軍を欺く

木曾は名にしふ山高く溪深く實に要害堅固の地あり義仲此に楯籠りて平家に抗敵したりしに當時平家は盛んに

して馬も鹿に通ずるの中なれば急ぎ討手に向けられける
 義仲此由を聞け及び奇計を施して平家を襲しふして吳ん
 せとて馳て其謀計の手術を爲しけるは木曾谷の上ふ布を
 一面に張り詰め小砂を散て平地を見せかけたり愈々手術
 整へしかば平軍今や遅しと待ちかけたり此方は平軍斯る
 ことゝと露知らず木曾勢を一蒐に踏破らんと進みしに木
 曾勢も向ひ戦ふと見えしが忽ち敗走するふぞ平軍と勢ひ
 に乘り此圖を外すを追詰て一人も餘まさず討取れと勇み
 に勇んで追蒐行くに此木曾路に廣き平地あるの訝しと思
 ふ間もあらず穴恐ろしや平地の忽ちパリくを割渡り轉
 々ころげ込むふぞ夫れ落穴なるぞ後軍止まれやと云ぬ
 耳にも入らず後より押立へしたて進み來るふぞ益々落ち

て死しけるの最と憐れなることゝもなり

奇正子曰く此小獸を追ふ獵師は前山を見ずとかや今平
 軍は此の獵師なり也

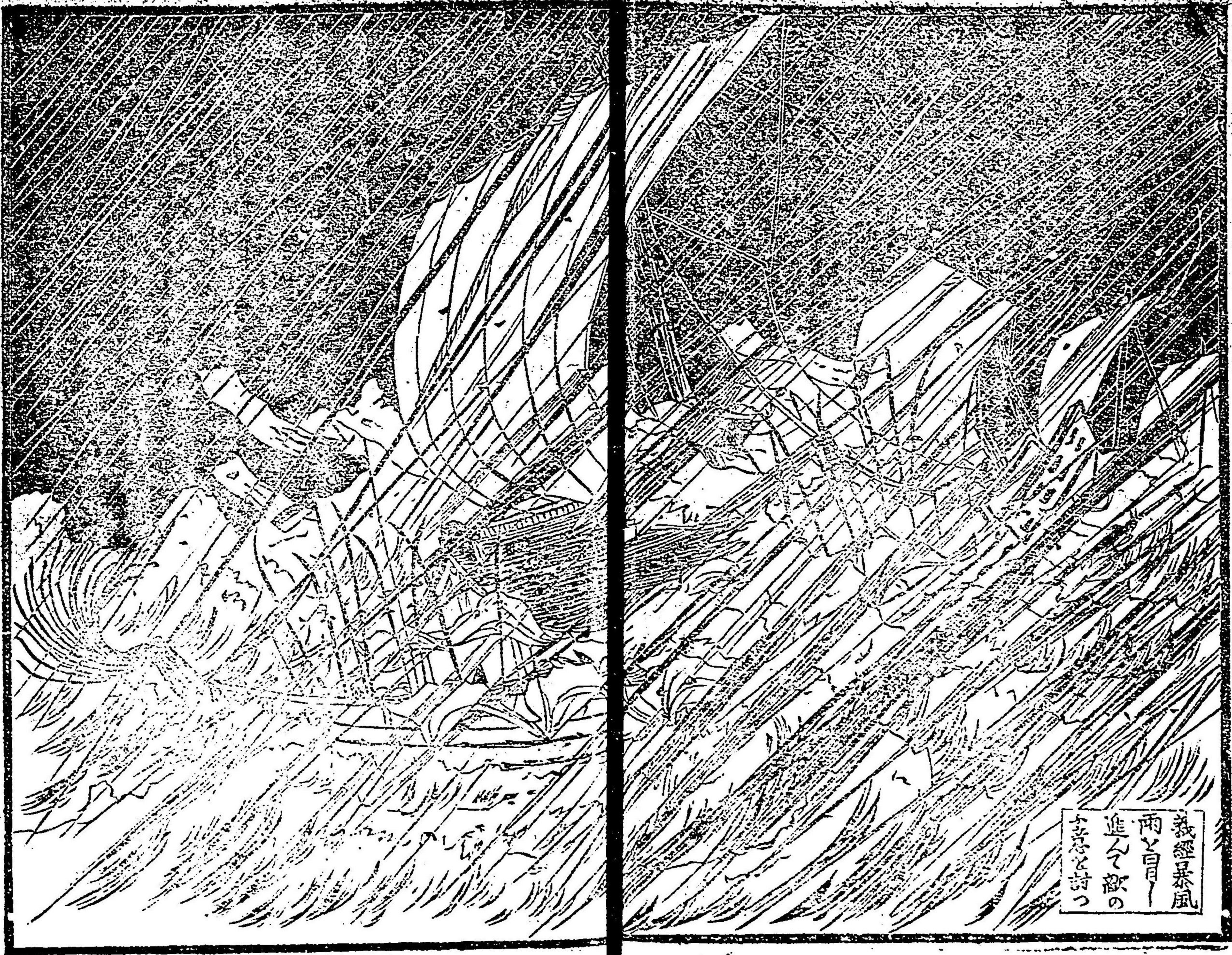
◎第三章 源義經

○義經暴風雨を冒して敵軍を破る

源順朝四國を攻んとて頃ろは元暦元年十月十六日午の刻
 纜を解て船を出す折節雷風俄ふ吹來て兵船濤に吹上げて
 七八十艘打破られたり其れを修繕として今日は逗留し順
 風を今やくと待ちけれどを風彌々烈しくして吹きたる
 しに十七日の實の刻に至て止みにけり偕て嬉しやと思ふ
 間もあらず一天忽ちのき曇り恰も墨を流すが如く急雨斜
 に數億萬の細引を飛ばすに鬚鬚て雷風の一轉して北風を

なりて烈しきこと南風に倍して木を折り砂石を飛して止
 まず然るに義経は風既ふ直れり急ぎ船出せと云ふにぞ氷
 主楫取申しけるハ斯程の大風に争でか船を出さるべき風
 少し弱し候を相待申せべきと云ふを義経大に嘆て逆風に
 出せこそ僻事なれ斯様の順風は願ふ所なり日並も館く海
 上も穩かあらば今こそ源軍の渡らめとて平家の軍勢の用
 意すること必然あり其所へ僅の勢ふて寄せたればとて何
 んぞ勝利を得んや大風なればよもや渡すことあるまじと
 油断の所へ渡てこそ敵ふ打勝つべし早や疾く此船出せ若
 し出さんに於ては身殺せ斬殺せと令しけるに予伊勢三郎
 大の中指打つかひて射殺さんと馳廻りければ水主楫取如
 何せん是れ程の風に船出したる事未だまし一定海底に沈

まんものを又出さずんば矢に中て死なんす實ふ進退茲に
 谷ると云ふべし然れども死の就れも一あり然るに船を出
 して馳死せよとて寅卯の間に義経の船を出す兵船の数千
 艘ありけれども甚だしき風なれば船を出す者なかりなる
 小只五艘を出す一番九郎義経二番畠山重忠三番土肥次郎
 四番和田小太郎五番佐々木四郎五艘の艘に馬を乗せ兵糧
 米を積み其從隊下部歩立等一百餘騎には過ぎず然れども
 此等の面々に上下皆一騎當千の兵士なり義経の獨り己れ
 の船をありに將を焚せ其れを目標として馳よ自餘の船に
 ハ箒を燈すべからず是れ敵に船數を見せし爲めあり然れ
 ば敵、我が船の寄るを見知るも船數別たす只一艘の船來
 るは難船のものなるべしとて曾て其用意なかるべし率進



我經暴風
雨の目
進み敵の
攻撃を討つ

めよとて波邊島より出帆を吹風、木の枝を折り立波、蓬菜の形を上げ氷主楫取吹倒されて足を立ることとも叶はず究竟の物共にて船を乗直まゝ帆柱を立て帆を揚ぐるふと高かす風愈々強く當りぬれ帆の裾を切て風を通し纜三筋十丈許に纏下げて碇綱數多下して脇楫面楫さして船を丁に換立て傍より風來れば面ふ乗りかゝり眠ふなれば中に乗り隙なく湯を取らず舳へ打波揺て艦を洗ひ艦を濟波如何にも叶ひ難けれども究竟の楫取など波の手風の手を作て大波をばのいくゞり小波をを飛越々々馳よ者共漕げよ者共とて曳聲を出して馳ければ常に三日あらずで漕げ行けぬ所を僅に三時にして阿波國海士子浦ふり着きふける此所に隙て平軍阿波民部が伯父櫻間外記太夫良連を

大將として三百餘騎にて固めける所へ暴風雨を冒して來るの船あるよと見えけるが只一個の燈あるは源軍の寄せ來るものとも覺ゆす正しく一個の難船來るを覺へつれ今少し穩なる風なれば救ひの船をも出せぬれども何小致せ此の暴風にての救の船も其難船とあふん見すゝ見殺しにするの不入情の如くあれども勢ひ是非もあき次第なりと云ふ間も荒々の源軍五艘押寄せ上陸して切立てけるにぞ平軍の案外は事にて上を下へと騒ぎ立て誰一人取ふ者もあく我れ先きふと敗走するを追詰々々討取りけるふ予暫時ふして三百餘騎大半討たれにり

奇正子曰く義經の學べる虎之巻の兵法を如何なるものあるか余未だ之を知らねども義經の戦等彼の一ノ谷

鴨越坂落と云ひ此の四國暴風雨渡船と云ひ皆通るべからざる所を命を惜まず進んで敵の不意に出るもの其常あるを以て見れば虎之巻の兵法とて越難出不意と云ふふあるまど推て知るべきのそ然れば虎之巻の兵法の智に属せんよと尋る勇に属するものと云ふべし後世加藤清正の四國渡海も亦此様に能く似たり前後共に風雨起りて四國討れぬるは恰も符節を合するが如く實に奇と云ふべし

○第四章 佐々木盛綱

○盛綱敵の反を計て鳥坂城を抜く
 佐々木入道盛綱が鳥坂の城を取圍みて攻め一時城中にてと男優りの坂頼女が討ひにて使者を以て寄手の陣へ申入

れしハ城兵今日までハ籠城したれども最早糧盡きて保つべうもあらねと愈々明朝は城を出で花々敷討死せんとこそは覺悟究つれ今日ハ早や申の刻も半ハ近く勝負を決する間もあるまじ憐れ明日に涉延べあらむ今宵最期の暇乞をもあし明日ハ早々より出張せし夫れとも御用意ありしものと由是非夜ふ入ても戦はんとの思召に候ハハ是非なく只今出張すべしとあらむれば盛綱明日合戦の趣き返答に及びける是れば坂頼女盛綱に由断なさしめ置きて今宵夜討せんと謀計あり故に城兵ハ仕濟またりとて専ら夜討の用意をすあしにハなる此方ハ盛綱返答したる跡にて何様未だ兵糧の盡くるとも覺えず疑ハしきことよとて只一人陣外へ出で小高き岳に登り遙る敵城の様子を窺

ひ良暫時眠居たりまが忽ち心に徹することのありしかを
 早々陣中に立歸り諸士を集めて申しなるを我れ昨日より
 敵の所爲心得を特に兵糧の盡きしと申すは怪きよとふ思
 ひま故甚だ案じ居たりしに只今思ひ合はすることのあり
 其密に敵城の様子を窺ひ見るに今宵城中ふ異なる煙立昇
 るの正しく兵糧を炊くと覺はたり明日の合戦に只今より
 食事の用意をすべからず能く考ふるふ今宵當陣へ夜討せ
 んとの企てなるべし其儀ならむ敵の謀計に就て計策
 を行ひ却て敵城を乗取べしとて先づ陣中にハ箒を少々焚
 せ士卒二百人許を殘し置たり如何も由断の留小持て爲し
 陣の兩方ふは伊澤五郎信光一千餘騎にて左に埋伏し後利
 與市義遠同じく一千餘騎にて右に埋伏し後には佐々木盛

綱一千五百餘騎を引具し自ら埋伏す借て又海野小太郎幸
 氏と盛綱子息小三郎盛季兩人各々一千餘騎づゝの兵を授
 け謀計を申し合め鳥坂山の麓の左右に埋伏させ藤澤四郎
 清親にハ一千五百餘騎の兵を授け宵より密に敵の後に向
 ひしを期に望んでかやうくと相圖をなし殘る三千餘人
 は遊軍とまて村上判官仲清も從ひ敵城と本陣との間程能
 き處に予埋伏せしめ手配既も定りしかば各々役目の持場
 へ出去て陣中には偽り寝て今も白川夜舟の寢入り盛り
 息雷く聲々然として密に目を細免ふを聞きなせして今や
 遅しと待ち掛けたり城中ふては盛綱我が謀計を察し備へ
 を爲せしとは露知らず今宵こそは奇手を微塵になさんず
 と勇と悦び宵より兵糧の支度なし丑の刻過る頃進發と相

定め頃、建久三年五月二十一日の夜中過ぎ、月と雲間より
 面出しつ、又ハ雲間に隠れつ、其狀小兒の戯れ、隠蔭或出、面と
 以ふに、髣髴りて月の走るかと思ふて、定小視れ、是れ雲の
 走る、され夜討ハ小勢程を善しとす、進退自由にして、働き易
 一敵陣に討入るとも、随分軽く引上ぐべし、合詞を以て、同士
 討ち、あよと軍令、定り一千五百餘騎を以て、夜討せし、大
 將平資盛と坂額女との城中に残り、夜も既に深行くに、予密
 に敵陣の動靜を窺てしむるに、随分怠りの體なる由し、告げ
 來せ、けれも仕濟たりと、一千五百餘騎の軍勢、城中を出で、草
 木も寝る、丑滿の頃、寄手の陣に至り、見る、ふ能く寝入としと
 見え、て、箒の火も消々なり、まかハ時分ハ好し、打入と云ふ程
 にと、あれ一同に陣中へ喚て、駈入りける、ふ靜りのへとて、音

もせね、能々寝入りし者、共かなと陣々、ふ入て見れども、更
 小一人も出逢もの、あかりしかば、心ならずも退き出づる所
 又左右より山も崩るが如く、鯨波の聲を發し、二千の伏兵一
 時に發り立ち、敵の前途を指塞ぎ、一人も餘ますな討取れと
 呼はりしかば、夜討の輩驚き、騒ぎ何んぞ圖らん、斯る用意の
 あらんとは、とて膽を冷し、戦ふ勇氣あらむと、呆立たる後
 より、鬨の聲を作て、盛綱法師一千五百餘騎、薙出て、敵兵の尾
 元より散々、射立ける、ふ予城兵愈々途を失ひ、三方を圍れ
 逃るべうもなし、餘りふ思ひが、ななきこと、あれば覺悟も思
 案を出でば、ころ討死せんことを、も打忘れ、只逃んと、狼狽廻
 る寄手の不意を討んずと思ひし輩、却て敵に不意を討れ、今
 は城兵等夜討、ふ出會たる心、ふて乱れ立て、逃げ行くを、三方

より取巻て餘なきと攻めけるに予、城兵多く討死してけり又鳥坂城ハ海野小太郎幸氏、佐々木小三郎盛季及び藤澤四郎清親三將の爲免に乘取られ敵を謀りまもの却て敵に討られて討れしこそ案外あることにもなれ

奇正曰く敵の飯煙を見て其心を推し却て敵の反を計る佐々木盛綱ハ上杉謙信恰も符節を合はするが如き謙信ハ飯煙の再揚りしを見て奇正其二手の手配なるよとを推し盛綱は飯煙の時刻早きを見て其夜討の仕度なることを察す名將の推察古今一なり嗚呼恐るべま

◎第五章 楠正成

○正成、奇計敵城を乗取る

楠正成は先年赤坂の城にて自害して焼死する真似えて落

矢たりしを敵實多と心得て武家より其跡は湯淺孫六入道定佛を地頭に据置たりなれば今は河内國に於ては殊ある事あらじと心安く思ひける所に楠五百餘騎を率じて俄小湯淺が城へ押寄せ息をも繼せず攻め戦ふ城中に兵糧の用意乏しかりけるにや湯淺が所領紀伊國の阿瀬河より八夫五六百人小兵糧を持させて夜中に城へ入るとる由正成風に聞て兵を道の切所へ差遣し悉く之を奪取りて其後の内ふありし米穀を取出し兵器を入替て馬ふ負せ兵士二百三人を八夫の様に立せて城中へ入んとす楠が勢之を追散さんずらんとする真似して追ひつ返へしつ同士軍を爲したりけるに湯淺入道之を見て我が兵糧入るゝ兵共が楠が勢と戦ふ予と心得て城中より打て出でるゝなる敵

の兵共を城中へぞ引き入れふける楠が勢共と先年己等の
 楯籠りし城ふて勝手知つたるふとなれを思ひの儘に城中
 に入りすまして彼の俵の内より兵器を取出しひしと
 堅めて鯨波の聲を予揚げたりける程に城外の楠が勢之を
 聞くや否や同時小鯨波の聲を揚げてひしと攻寄城門
 を打破り堀を乗越えて攻立けるに予湯淺入道斯の何
 小斯の如何に味方に返忠の者あらんずるかと大ふ驚き騒
 ぎ内外より取籠られて攻討れ今ハ防禦と小術あく湯淺は
 僧頭の首を伸て降人に予ハ出でふなる
 奇正子曰く僥倖にして偶然なく敵人を擒にして敵の術
 を知り以て謀計を運ぶずは其謀計奇妙なりと雖ども謀
 計を施す所以のもの面白からねば此の如き謀計は本書

總て之を略しぬれども今楠正成の此謀計ハ其始め奇な
 ぶざるも其終りの妙非常にして始めの遇然を忘却しむ
 るものあり故に特別に取て以て茲に之を編入すと云爾
 ○正成泣男と用ひて大に敵軍を破る

楠正成の人を用ふるや苟も一藝一能ある者は皆之を召
 しかうへて不時の用ふ供ふ茲に泣男杉本左兵衛と云ふ者
 あり之れに泣けと命ずれば即座に涙を流し哀れにも亦事
 々しく泣く其身の泣くも鬼も角も傍の人之を見れば竟に
 泣かぬ辨慶とても泣かずして止むことなし況して今日の
 人の此泣男の泣くを見れば自ら哀れを催ふして貰ひ泣き
 に涙を流すはいと不思議のことなり正成之を一藝人とし
 て召しあうへ置き自ら新田義貞の陣中に行て傍への人を

御除きあれ密談仕るべきまどありとて密ひそかに申されけるに
 某明日律僧を位立京に上せ今日の戰場せんじやうふて泣せなん然ら
 ず京勢怪あやしきをなす事の所謂いふを問尋ね申さんに僧に謂はせん
 ずる様さまは是れハ楠所くすの縁の僧に候に昨日の合戦あつせんに楠ハ矢
 に中なかつて討うれ北畠新田も討うれ給たまふ由よし候に是に依よて楠の死し骸が
 を尋ね求め菩提ぼだいを吊たひ侍まらんと存ぞんずる所ところなりと云いて尋たず
 常情じやうじやうの深ふかかりしよとなき物語ものがたりせ聲こゑを擧あげ感か涙なみだを流ながし
 て泣なかしむれば幾いくりの僧にも亦また之これが爲ため先まに哀あはれを催もよふされ
 潛ひそ然かにと泣なかまむれば人の心こゝろの愚おろさは此事このことを忠節ちゆうせつ顔がほに成なて
 足利尊氏あしきのみつぢ兄弟あには語かたをなむ然しかるに彼かの兄弟あにの者もの共とも愚おろなる故ゆゑ
 實まことぞと思おもひ手の者もの共とも觸ふれ聞きかせて心中こゝろ甚こだ侈たりも然しから
 ば味方夜半あじ過する程ほどに下部しも共ともに令して明あ極ごく二三千計にりも

燈あかりして東西北三方の山の道々へ行かしむべし然らば彼れ
 兄弟東寺より之を見てきてハ宗徒の者共が死しまたるに依よりて
 軍勢共の落行おちあるに討うち止とめよとて諸方へ兵を分ち遣はら
 へすべし然しからば其跡あとへ味方一手ひとてに成なて押寄おしよせば彼れ兄
 弟を討取うちあんとて掌てのふあり諸軍の圖ずだに脱だし給たまへねば此
 謀計はかり中なれりと申されしかを義貞が曰く實まことに妙計めうけいふて候去
 りもがら其召仕めいしはる、所の男一人おとここそは泣なき申ませんすれ
 自餘みづかの僧にハ何事なにごとにか泣なれ候にはんやと申されしかば正成の
 曰くいやよと彼の者の泣く消息おほしを見てハ外ほかある者も自ら
 何なにとはなく物哀ものあはれまかりなりて如何なる心強こゝろき人ひととて
 不覺ふかく愁しみ涙なみだを催もよふさぬ者ものとてハ之れなしと申されしりば
 義貞よしか不思議ふしぎの者ものを召置めいおけ候にこと設して諸大將へも亦此旨

を密々小談し合せて正成は宿所に歸り杉本を兵衛を呼寄せて此趣きを申し合め此謀計成りなれば汝を以て所領の主となしぬべし然れども僧の作法を少しも知らずして如何ありとて傍近き里小律僧のありけるを探り頼もたれど戒法に背くとて堅く肯は申然らばとて其僧を正成の陣中に留置して返さず是れ其謀計を漏さじとなり然るに江州和爾の邊に寺院ありけるとて八尾別當に杉本を指添て遣りして云はせけるは正成昨日京都の合戦討死致されぬ偕死骸を求免出して葬送をも仕り度侍る此者は數十年來正成の恩澤に浴せし事別えて以て深し今更忘却するに忍びず剃髮染衣して菩提を訪んと欲を願くは貴寺の弟子とし賜らんと申しければ住持の僧一々聞て誠子を心得て甲

斐々しく頼れければ杉本聽て髪を予剃とふける其れより同侶三四人談ひて密に京ふ走り上り昨日の戰場ふ至らんとし杉本道すがら同伴に語りけるは正成のみにあらず新田も討死し給ふ由北畠も深手負ひ給ひたりとも又討死したりとも申せと語りければ同侶を亦哀れ名將遠にて渡らせ給ひま者をとてそゝろふ袖を予濡しける偕て其れより戰場に至り泣々死骸を尋求るに昨日敗軍の勢共或は主或は親或は子弟など討れし者數多ありければ此等も死骸を求めけるに杉本最と哀れふ人に勝れて泣き求めければ怪む者多かりと程ふ左の隠すべきにあらずとて諸大將の討れし由を語るに予人毎に涙を流さぬはなかりけり然れば此事即時に足利兄弟の耳ふ入りむかば近習の者共偽て

親類の死骸を尋る體にて杉本ふ此由を問ひければ杉本涙
 を押へながら件の旨を語るに尋ねし者も最と哀れま覺
 へて共に涙を流しける借て死骸を尋ぬれども其れと覺
 まれ死體もあく日も昏黒に及びしかば同侶の借を先へ返
 へま杉本の跡を留り京中ふ入り敵の様體を窺ひ得て歸り
 しに楠正成の首新田義貞の首とて獄門の木に懸けて高札
 を添へて置きければ杉本之を見て最と可笑く想ひ懸て京
 を出で亥の刻過る比東坂本に歸りて正成に斯くと語りけ
 れば正成借ても仕仰せたりとて下部共明松燈し連ねさせ
 大原、鞍馬の方へ遣はしければ京勢之を見てスハヤ山門の
 敵共こる諸大將を討れて今夜諸方へ落行くと見へたりと
 云ければ足利兄弟之を聞き實ふもと思ひ去れば落さぬ機

に致せとて諸方へ勢を予向ふける正成は猶ほも心元な
 るとて足輕の兵百人計を勝て落人に仕立口々へ指遣はし
 ぬるに諸方に伏勢のある由を申す正成借て疑ひなしと
 て諸大將一手になりて西坂を下りて直ちに尊氏の軍小薄
 り火を縦ちて敵謀せし程に足利兄弟周章ながる其れ敵こ
 ろ寄せたれとて上を下へと騒ぎとて大に潰れて走り甲を
 委て野を蔽ひぬけり正成等甚だ敵を追はずして引退き
 しを知らず尊氏の前軍の味方の後軍を顧みて追兵の來る
 よと爲し往く自殺するをありて死亡大半ふ及びけり
 奇正子曰くナト滑稽の評なれど泣く兒と地頭には勝た
 れぬとやらで足利尊氏も亦泣男に勝たれぬものと見
 えたり杉本左兵衛は獨り己れの泣くふ妙を得るのみ

にあらす傍の人までも哀れを催ふして泣かしむるの妙
藝ありて俗に所謂泣て勝つとの謀計を以て能く敵を破
りしと雖ども今本書を見る者をして泣かしむること能
はずして却て之を笑はしむるものあるの最と可笑な謀
計なれ

◎第六章 新田義貞

○義貞、託神の謀計を以て兵氣を鼓舞を

新田義貞上野國新田郡小旗を揚げ鎌倉を討んとして漸次
進んで極樂寺坂へ予討出でける頃しも五月二十一日の夜
半よして明は行く月敵の陣を望み見れば北は切通まで
山高く路險しきに城門を搦へ垣楯を搦て數萬の兵陣を變
べて並居たり南は稻村崎にて沙頭路狭きに浪打涯まで逆

木を繁く引懸て澳四五丁が程ふ大船共を並べて矢倉を搦
きて横矢に射させんと搦へたり實も先き此の陣の奇
手叶はで引きぬらんも理りなりと見ゆければ義貞馬より
下り甲を脱で海上を遙々と伏拜を龍神ふ向ふて祈誓り
るの傳へ聞く日本開闢の主伊勢天照太神の本地を大日の
尊像に隠し垂跡を滄海の龍神に顯去給へりと吾君其苗裔
として逆臣の爲先に西海の浪に漂ひ給ふ義貞今臣たる道
を盡さん爲めに斧鉞を把て敵陣に臨む其志し偏へに王化
を資け奉て蒼生を安からしめんとなり仰ぎ願くは内海外
海の龍神八部臣が忠義を憐み給へて潮を萬里の外に退け
道を三軍の陣に開じめ給へと至信ふ祈念し自ら佩ぎたる
金作りの太刀を抜て海中へ投げ入れたるに時しも月輪の

没りに際しければ月輪の引力なくなるや否や稻村崎俄に
 二十餘丁于上りて平沙渺々たり横矢射んど搦へぬる數千
 の兵船も落行く鹽に誘はれて遙の澳に漂へるふを義貞に
 従ひ來とし六萬餘の軍勢斯く奇瑞のありし上は合戦の勝
 利疑ひなし夫れ既ふ勝てり進免や進免と互に勇めつ勇め
 られつ諸軍大ふ悦び勇んで稻村崎の遠干瀉を眞一文字ふ
 懸通りて鎌倉へ乱入して遂に大勝を得たりける
 奇正子曰く潮の差引は月輪の引力の所爲にして固より
 一定の理あるものなれを其差引を敢て神意の左右する
 所にあらず義貞の未だ窮理學の開けざる野蠻の時代に
 生れたる人まれを潮の差引の月輪の引力が爲せるもの
 なりとば知らねども是れまでの經驗ふよして凡る何時

頃ハ潮の引くと云ふるを以て兵氣を鼓舞せ
 んが爲め斯くは神に託せるなり實ふ妙と云ふべし然れ
 ども既に窮理學の開れたる十九世紀の今日の社會に
 用ふべからざるなり兵家宜して察すべし

○義貞奇計敵をえて同士討せしむ

新田、足利三井寺に兵を交へて後ち新田義貞と味方二萬三
 千餘騎を三手に分て一手を將軍塚の上へ擧げ又一手を眞
 如堂の前より出し又一手は法勝寺を後に當てし二條河原
 へ出きて相圖の煙をぞ擧げしける偕て又義貞自ら花頂
 山に打上て敵の陣を遙に見渡せば上の河合森より下の七
 條河原まで馬の三頭に手繩を打懸け鏡の袖ふ袖を重ねて
 東西南北四十餘丁が間錐を立ゆる地も見得ず身を峙てし

打圍免たり義貞弓杖にまがし合せられけるハ味方の勢を
 敵ふ比較ふれば大海の一滴九牛が一毛にたも及ばず然れ
 ハ尋常の軍をせよ必き勝つことを得ト故に相互ふ面を
 知り知られたる者共五十騎づ、手を分けて笠符を
 取捨て旌旗を巻て敵の中ふ紛れ入り此處彼處ふ扣へ暫く
 相待つべし將軍塚へ上せつる勢既に軍を始むと見ば此陣
 より兵を進めて闘はしむべし其時に至て御邊達敵の前後
 左右に旌旗を指揚げて馬の足を止めず前にあるかとせば
 後へ抜け左ふあるかとせば右へ廻つて七縦八横ふ亂れて
 敵に見する程ならバ敵の大勢を遷て味方の勢に見えて同
 士討をするか左なくバ引退くハ尊氏此二ツの中を出づべ
 ろふすと謀計を出されしかバ諸大將の中より選兵五十騎

づ、勝り出して二千餘騎各一樣に中黒の旌旗を巻て紋を
 隠し笠符を取て袖の下に收め三井寺より引後れたる勢の
 體に持てなまて足利勢の中へぞ馳加はりける尊氏と敵斯
 る謀計ありとは露知らず宗徒の兵共に向ふて令せられけ
 ると新田の何時も平場の懸をころ好むと聞きしに山を後
 に當て、懸出でぬハ如何様小勢の程を敵に見せじと思へ
 るならん將軍塚の上ふ取上りたる敵を置てと惡しありさ
 ん師泰彼處に馳向て追散らせと云ひければ越後守畏りて
 候と申して武藏相摸の勢二萬餘騎を卒して雙林寺と中靈
 山とよど二手ふなりてぞ登りける此方は新田方此處にハ
 脇屋右衛門佐堀口美濃守大館左馬助結城上野入道以下三
 千餘騎にて向ひけるが其中より逸物の射手六百餘人を勝

して馬より下し小松の蔭を木積に取て指し攻め引き攻め
 散々にぞ射させたりける嶮き山を登り兼ねたる武藏相摸
 の勢共物具を徹ぎれて矢庭に伏し馬を射られて躍落され
 けるに予少々躊躇ふて見ゆる所を得たを賢と三千餘騎
 の兵共拔連れて大山の崩るゝが如く眞倒さまに落し懸け
 たりけるに予師泰が兵二萬餘騎一足をもためず五條河原
 へ颯と引退く此處にて杉本判官曾我二郎左衛門を討れに
 けり新田勢態と長追をせず猶得東山を後に當て、勢の程
 を予見せざりける搦手より軍始まどけれを大手の軍勢其
 聲を受けてドツと鯨波を作り合せ天地を響かまて戦ひけ
 る有様のすさまじける事なりけり足利勢ハ八十餘萬の大
 軍よまて新田勢ハ僅に二萬餘の小軍なれども皆心を一に

まて懸ける時と一度に颯と懸けて追ひまくり又引く時ハ
 手負を中に立て静ふ引き二萬餘騎の懸引も自由自在にし
 て宛然一身の懸引ハ異なす然るに足利勢ハ大軍なれど
 も人の心調ハすして懸くる時も揃はず又引く時も助けず
 萬人萬心思ひ想ひ心ろくくに闘ひなるに予二十餘度の懸
 合ふ新田勢の勝色ならざるはあし足利方大軍なれば討た
 るれどもすかや逃ぐれども遠引せず始終一處にのこ集り
 居とどける程ふ最初に紛れて敵よ交りたる一揆の勢共尊
 氏の前後左右に中黒の旗を指揚げて亂れ合てぞ戦ひける
 孰れを敵孰れを味方共辨へ難ければ東西南北を呼び叫ん
 で只同土討するより外の事ぞなかどける足利を始め吉良、
 石堂、上杉の人々之を見て味方の者共が敵と作合て後矢を

射るよと思されれば心を置き合ひて高上杉の人々は山崎を指して予退き足利吉良石堂仁木細川の人々の丹波路へ向て落ちにる然れば新田勢彌々勝ちふ乘て短兵急に拉ひしぐふぞ尊氏も今遁る、所なしと思ひを定め梅津桂河邊にて鎧の草摺疊と揚げて腰の刀を抜んとせまふと三箇度に及びしが尊氏の運や強かりけん定禪律師の働きによりて九死の命を一生に救はれけり

奇正子曰く孟子稱す天の時は地の利に如かき地の利の人の和に如かずと又淮南子稱す五指の更るく進むと百人の俱は捲手の一埵に若かず萬人の更るく進むと百人の俱に至るに如かずと今夫れ新田の勢人の和を得て地の利を得且つ奇計を運らすに此方の足利の勢此の三つの

ものを欠く其人員の多少を異ふするも其勝敗固より知るべきのみ

◎第七章 蒲生貞秀

○貞秀、水乏しくして水多きの體を見すの計略

文龜三年細川武藏守政元の臣澤倉と云ふ者武略ありて近江を半を切り従へられども蒲生貞秀音羽の城に據りて従はねば之を攻めんとして押寄せ見るに山城なれば水乏しからんとて水の手を取切りて渴に苦しませんと計りたる貞秀矢倉の首に馬共數多率出させ白しらげたる米を桶に入れて汲み掛り人々睨目にありて馬を洗滌ふの體を示しと澤倉の遙に之を見て白米と知らず眞の水なりと信じ城中思ひの外水多し斯くては長陣もなるまじ若し長

々と陣せば兵糧盡きなんとて圍を解て引退くを見すま
し貞秀案内能く知つたる小倉暇の要害に懸て出で一同に
切て掛り大勝を得るは實ふ可笑かりけることゝもあり
奇正子曰く貞秀の此計器手品にさも似たり柴田勝家ハ
水乏して水以て其水多きの體を見し貞秀ハ白米以て其
水多きの體を示き彼れハ近江にありて爲せる業ふして
此れと遠きにありて爲せる業なと其手術を異にせるハ
其遠近相同じかゞざればあり

第八章 武田信玄

○信玄敵將の氣質を聞て奇計を運らす

永祿六年二月武田信玄、上野を攻めんとて其勢二萬五千餘
騎整々堂々として上野に著陣ありけるに龍目の城代に小

幡尾張守信定二千餘騎を馳參り嶺の城より一里此方を
る岳原に陣所を構ふ時信玄小幡信定を召して嶺の城を
守り居るに小幡圖書之介ハ其氣質如何なる者ぞと尋ねら
るれば信定承りて圖書事臣が舍弟なれども義氣少あく武
勇ハ少しく之れあり候得せも僅の事にも周章致し候者に
て候と申上ぐれば信玄然らば一計を施すべしとて内藤修
理を召され今宵我が旗本よと掉小挑灯を付れて火を揚げ
さすべければ夫れを相圖にて汝が支配する小荷駄一ツ
毎に數個の挑灯を結付り馬引共小松明を持せ高き所々ハ
追登まへと命じ借て松井田箕輪等後詰を爲さんとする
敵ハ押への勢を指向け旗本組、脇備、後備のを以て圖書
之介が籠とたる嶺の城へも押寄せらる頃は如月二十二日

風未だ寒く宵暗に徐々を寄詰めて亥の刻に及び小高き岳に登せ相圖の挑灯上るや否や諸軍一同に閃を發し貝を吹立て太鼓を打鳴し喚叫んで取圍み今や此城徹塵ふ爲きんす勢ひにて總攻の氣色に見ゆければ城將小幡圖書之介仰天して周章ふためき櫓に飛び上りて見れを四方の岳に炮火充満松井田、笑輪、安中の押への大軍遠籌殆くとして物凄じく更に片時も持堪ゆべき様なければ迎も籠城叶ひ難しとや思ひけん其夜密に城中を忍び出て笑輪を指してせ落行きける大將既に斯の如くなれば士卒何ん予止まるべき我れ先きふと落行くを待ち設れたる武田勢此處彼處より顯れ出で太刀衣服を剝取り直ちに城をぞ乗取りける

奇正子曰く信玄の此の計孫子の所謂彼れを知り己れを

知る者勝つと云ふものあり武將第一の要ハ先づ敵將の智愚其性質の如何を知るふあり今信玄第一に之を尋ね知る其勝利既に此問ひの所にあり

◎第九章 上杉謙信

○景虎、寝て時機を待つ

上杉謙信未だ長尾景虎と云ひし比長尾晴景と越後下濱に兵を交へし各龍虎の勢ひありて互に雨となり雲とあり負けず劣らず必死を極めて戦ひしが其内宇佐美駿河守の横鎗の爲先に晴景勢突き崩され米山指えて予敗走す景虎勢は敵を追立るふと竹を破るが如く甚だ急にして既に米山の坂下まで追詰め勝に乗て責上らんずらんとをるを景虎急に人數を押止め殊外草臥しやらん何となく殺氣の

差し来りとりとて少時寝に就ん間汝等も亦慮を休めよ
 馬は杖秣を云ひ捨て、馬より下り傍なる小屋に入り寝
 てる所へ宇佐美駿河守勢を進めて馳来り景虎が有様を
 見て大に呆れ此勢ひを脱ぎす米山を責上りて敵を半途に
 追打直ち頸城へ討て出でる晴景の本城府内を乗取ら
 れとて手裏ふあり今此勢ひを失ふべからずと小屋に入て
 景虎を敵れども景虎の甲を枕ふし高放射して臥したれば
 本庄、宇佐美氣を苛ち早く討立ち給ふべしと再三動り起す
 れども景虎は前後をも知らぬ體なれば皆々大に呆れ諸將
 口々に齒を切り斯くまで仕裸せし敵を討たず安然と此處
 小勢を止る内晴景府内へ歸城し城を固めなば小勢ある味
 方如何に思ふとも容易く討たる事と叶ふまじ又其内へ

ハ國中の諸將晴景に一味して我が旗を討んも未だ測られ
 ず然れを我等一人を生て歸るまど能くんや以の外の大事
 なり其上黒田兄弟又我が楯尾城の虚を伺ひ責ることあり
 ば進退茲に谷るふ至て臍を噛むとも詮なきことなり十分
 の勝利を脱去討つべきを討たざるハ景虎君の運の極め是
 非なき事なりと始めの氣込に事更り勇氣撓みて見へける
 が晴景勢既に三分の二程米山の峠を越んと思ふ比景虎ハ
 クと起上り早具を吹かせ馬を真先に出し時分の能き
 予唯一息に敵を攻討ち其勢ひ小乗て府内の城を押潰せよ
 軍小は早や勝たりと急小軍勢を操出す其猛勢初め小倍し
 て見へければ諸將大に仰天し元來待たる軍勢なれば大に
 廻み曳々聲して米山の峠を馳登る懸れより先き晴景勢は

米山の險阻を遊登りしが長尾越前守晴景を謀必定景虎跡
 を追ふて来るべし半途小待ち受け器より敵を足下に見下
 し追下し給へと云ひしるば晴景實にもと上り坂中に備へ
 を立て待掛けしに景虎更に追來らざれば細作を入れて動
 静を探らしむる小景虎の白川夜船の寐入り盛り雷御森々
 とまて前後をも知らぬ體あれば細作の此動靜を窺ひ終り
 て陣所より立ち回りに斯くと告げれば心淺き晴景は緒て
 の景虎に追來るとあつじ越前が慮りころ過ぎされとて
 追々諸勢小觸れ急々府内へ引退くべしと上下心を安んじ
 米山を上り越へ既に下り坂になりし所へ景虎が勢圓を作
 り鐵砲の筒先を揃へ一同小動と打込みしかば晴景勢矢庭
 に百餘人枕を並べて倒れ死を景虎は鐵砲の士を探り代

へく打蕘る其音山谷に響き山も崩るばかり鬼小島彌太
 郎甘柏二郎吉奈彌辰彌荒川吉藤等米の丸を盡きま指物を
 翻へし眞先に馬を進め敵を目の下に見て突立てければ晴
 景勢大に驚き浮足になりて亂れ立ち心は矢猛に思へども
 景虎勢は坂上ふして晴景勢と坂下のことなれば遂に大崩
 れとありて敗走せしが龜坂の切所とて此坂中にあり其
 地は數千丈の峻にて巖石壁立し下と漫々たる大海ある大
 切所へ追詰られ引歸さんとをれば後より味方の敗兵に押
 付られ人馬彌が上り追落され身を碎き頭を切り棧より
 落て死する者數知らず散々になりて敗走せるは最と憐れ
 ある事共あり斯くて景虎勢は思ひの儘に勝利を得て米山
 寺まで追上りて暫く爰に陣を取りし時宇佐美本庄小向て



景虎假睡
歌の細作と
欺きて其
時檢せ侍

此物語をなし舌を巻いて怒れ敢り又宇佐美は諸將に對ひ
 某先刻少しも心付ずして君を誹謗り奉りしが只今に至
 り初めて合點せし事の候は君米山坂下にて逃るを追はず
 して匿り給へしを各々と合點候やと尋ねければ諸將皆々
 子細を知らず願くと語り給へ駿河守去ればにて候只今
 至て推察するは晴景勢米山へ逃上る時之を追討ち敵返さ
 れなば湯小敵を受け追立てるゝハ必定なり君之を積り
 態と睡る真似して上り坂を上ぼせ濟し下りに赴く時を
 計り追討ち給ふ御謀なると語りしかハ諸將皆舌を巻て感
 じ合へにけり

奇正子曰上り坂と下り坂の間は實に間髪を容す若し少
 しく早き小過ぐれば敵未だ下り坂に至らず尙は上り坂

ふありて追兵を攻下して大に之を取るべき去りて若
 し又少しく遅きと失れば敵早や坂を下裸せて平地に
 至り大返しに返へして戦ふ程ならん勝敗未だ得て知る
 べからざるを暫し寐の甲枕小就き敵の細作を欺きて
 其時機を待ちしは誠に神通の事と云ふべし

○謙信、敵の反を計て其不意を襲ふ

甲越展々川中嶋に兵を交へたりしが未だ墓々敷勝敗もな
 かりしかハ武田信玄は大正大奇の備へ以て今度こそ是
 非に上杉謙信が首を取らんとす計りふける抑も此大正大
 奇の備へと申すは山本晴幸の獻せ去謀計にて味方二萬餘
 騎を二手に分けて一萬二千餘騎を大正の備へとなし是を
 大將の旗本と見せ其實屬將の軍勢ふて謙信の居城西條山

へ向はして戦はしめなば謙信負けても勝ても西條山を打
 立て雨の宮の渡を刎越し川中嶋へ出来り善光寺の渡より
 犀川を心指して引取るは必定なれを其時實の旗本は大奇
 として八千餘騎の備へを以て川中嶋に待催け謙信が引取
 る所を前後より引包んで攻撃んと予計りけるふて馳て甲
 軍は其手配をぞなしにける正兵は最初越軍の勇氣盛んな
 る時よ戦ふものにして奇兵は其勞れたる所を待つものな
 れば正兵を多くして奇兵を少なくぞしたりけるなり俗て
 此方と謙信其夜高橋に登りて遙かふ敵城海津の方を見渡
 すに烟氣の立登るを窺ひ見て快然として柿崎、宇佐美、直江、
 宇野等を呼んで申しけるは明日敵より戦かひを催はずと
 見ゆるり我れ今日もそ信玄が法師首を取るべき圖を見付

け得たり必定信玄明日と有無の一戦を予遂げんと欲すと
 見ゆたり我れ其術を察するに甲信の軍勢を二手に分ち一
 手は此方へ指向け一の合戦を始め勝敗に拘へらず味方越
 後へ引退く所を信玄入道が旗本を以て川中島に待受け戦
 ひ疲れたる我が兵を一人も残さず打捕んと企てたること
 姿の鏡に寫るよりも猶ほ明かなと其子細は海津の方よ飯
 煙と覺ばしき烟氣の兩度に立登りしこと必定我が案相違
 あるべかす我れ信玄が胸中に入らずとも我れ之を察せ
 るふと其肺腑を見透まか如し敵の謀計を察せれを必ず味
 方の勝利あり我れ既に信玄が謀計を見抜きたり信玄然様
 のふとなすパイア我れ今宵の中に雨の宮の渡を越て思ひ
 も寄らぬ川中島に打出で信玄ふ膽を冷させ呉れずんもの

をとて諸將に向ひ今度の合戦こそ謙信が生前の面目に開
 ける軍あるぞや義を重んじ忠を思ふ方々の我が馬前に於
 て身命を捨て戦へれよと命を傳へ城中にハ數多捨鉢を燒
 き多く旌旗指物等を風に靡かし最と嚴重ふ備へたる體を
 見せし敵をして容易く手出なさしめず長く隙取て後詰の
 間に合はぬやうふと計ひ偕て諸軍は甲軍と摩違ひに打立
 ち八代の渡り川中島へと打出せらる其時未だ寅の刻なり
 越後方の先鋒ハ柿崎和泉守二陣ハ上杉謙信左りは舊村上
 義清が家臣本庄越前守、柴田因幡守右ハ山吉玄蕃、北條安藤
 守後備ハ甘粕近江守、次ぎハ直江山城守小荷駄奉行として
 備へさせ精兵僅か八千餘騎謙信秘術の備立ふして一陰一
 陽の法あれハ一備へ敵ふ當る時ハ先だの一備後ふ繰返し

屈伸往來首尾助るの陣法にて世俗に之を呼んで車懸りと
 云ふ諸軍枚を銜み次第々々に信玄が旗本指して予進寄る
 頃しも秋の末なれば未だ東雲の川風ふ朝霧深く立蔽ひ散
 残りたる樹々の葉の取も弓咥喰瀧一敵寄するとの白露の
 甲斐方にハ川瀾の深きが儘に眼の前越軍の押寄しを夢に
 も知らでありける所へ良卯の刻に及ぶ頃朝霧漸く晴渡り
 南の方を見渡せば這は什麼如何ふ這ハ如何に眞先へ竹の
 丸に三羽雀の大旗、大根の打懸の大馬騾を朝風に颯然と靡
 へし越軍雨の宮の渡しを打渡りしと見ねて姥捨山の東川
 中島の廣野に忽然として扣へさり甲軍大ふ驚然驚破謙信
 押寄せたり斯ハ何時の間にかや斯る大軍の此地に押來り
 しや天よりや降り來りけん地よりや涌き出づらん誠ハ天

魔の所行なるとさむもに雄る甲信の勇將猛士も恐怖の色
 をう顯しなるを理なれ然程に甲軍の先鋒此由信玄の本陣
 に注進し來れば信玄南無三寶仕損じたりとて急ぎ晴幸を
 招き備立を變へて防禦がんと手配せる間も荒々の越の先
 鋒柿崎和泉守が一手甲軍飯富三郎兵衛、内藤豊後守が備へ
 に會釋もあく突き當り雙方必死となりて戦ひ遂に亂軍と
 あり互ふ龍虎の勢ひを以て揉合しが甲軍の固より不意を
 討れたるとなれを終に大敗となりて名將數多討れ軍士山
 本晴幸を討死せるハ謙信が推察の能く圖ふ當りしかれ
 奇正子曰く本役武田方西條山へ向ひし正兵歸り來りし
 より上杉方敗軍と變せしを以て世人或は此合戦に勝敗
 なしと云ふ者あれを斯ハ深く其事實を究りざる言とこ

そ云ふべけれ何ぞや甲軍は一倍ふ過ぎて越軍は半ばに
 足らず而かも越軍の前勝は大勝にして甲軍の後勝は小
 勝なり甲軍は多くの名將を失ふ大敗を取るも越軍は一
 將をも失はぬ小敗ふ過ぎず大勝の固より以て小敗を償
 ふて餘りあるも小勝は固より以て大敗を償ふふ足らず
 本役の越軍勝ちにして甲軍敗けたること秦鏡に掛けて
 見るが如く判然たり然るを勝敗なしと云ふハ實に事理
 を知らぬ者と云ふべし應

◎第十章 山本晴幸

○晴幸磁石謀計を以て村上勢の備立を變ず
 爰に信州小縣郡戸石城と云ふて村上義清、小笠原長時と相
 持の城ふて村上よりは藥師寺右近が舍弟同苗彌次右衛門

に其勢一千三百人入置き小笠原方より長深右兵衛大夫
 を大将として其勢一千人を添えて龍岡家の勢合せて二
 千三百人動もすれば小縣郡海野の邊へ乗出して武田の領
 分を放火なごまけるに武田晴信固より氣早にして少し
 も堪へたまり得ず頃るは天文十五年三月十四日戸石城に
 予押寄せける村上義清此由を聞き早速後詰に出で、戦ひ
 した遂に武田勢大敗せり此時晴信左右を屹と見廻し此上
 と手が旗本の勢を以て村上が勢に突き入り義清と一戦の
 勝負を試み自然味方總崩れとありなば討死するに如くと
 あしと既に坐榻を離れて馬に乗んとなしける所ふ山本勘
 助御前に對ひ如何と我君村上が勢の多に上ふ甘利、横田が
 戦死の上と此隊の敗る、事只今の間あり是程に崩れ立た

る味方なれども此一戦忽ち味方の勝利となるべきことあ
 りと云ふにぞ晴信申しけるは鬼神が出でたらばいざ知ら
 ず人間の術ならんふは假令孫武、孔明の輩が再び出でたり
 ども今斯くありし軍を持堪ることと思ひも寄らず所詮居
 負にせんよりハ事る村上が旗本に突入り難儀を決し敵
 を戸石の戦場に出すの外他事あるべからず晴幸僧頭を振
 り立てさしも名將ふて渡らせ給へども御年若く在すよ
 り御短慮にこそ覺え候へ危戦を挑ます身を全ふし始終の
 勝利を肝要と致すこと古今長將のなす所ならめ斯程にな
 りたる戦にては候へども忽ち一戦ふ打破る手段の候晴信
 の曰く开は又如何なる謀略なるぞや晴幸が曰く今敵西の
 方より御旗本を必がけ東に向ひ來ること流水の低に下る

勢ひあり此備へを轉じさせ敵の馬の頭を南に向はせ候は
 い敵は日輪に向ひ目暗みたる所を味方敵の横を討つに便
 ありければ一同横さまに突き入らむ味方の勝利となるこ
 と疑ひなく候晴信の曰く其理は然るべしと雖ども斯る軍
 になりては味方の勢だふ如何ともすべき様なし況して敵
 の備へを自由に南へ向はせんこと思ひも寄らず晴幸重ね
 て然らば後軍のしまりに罷ある諸角豊後守が七十人と某
 が預る所の兵二十五人を合せて九十五人の將を某に預け
 給はし暫時の間に一討略仕り敵を南頭へ備へさせ申すべ
 え敵南の方へたに備を直して候はし味方の勝利其時にあ
 り必の横合より突入て君の采配を以て自ら突破り給へ晴
 信喜悅斜なす速ふ一方零致をべしと諸角豊後守を召さ

れ急ぎ汝が勢を晴幸に借すべしとありければ晴幸忽ち馬
 に打乗り九十五人を引率し何れも物見小旗の用意して下
 澤の方より戸石村の後を廻りて遙かに村上勢の南方に於
 押廻しける此時村上方押への人々と甘利横田が討死の上
 に小山田備中守は手紙を被り戦ひ難儀なるにより甘利が
 手に加はりて居たりし米倉丹後守自ら鎗をふッ取りしこ
 きて村雲立たる村上勢を三度まで突崩すと雖ども既に午
 の刻下となりて持堪へ兼て東に向ひ引く所を村上勢ス
 ハ味方の勝つべき時ありと勢ひ大に加り武田勢を残りな
 く討取れと潮水の湧くが如く次第々に押来る所ふ南の
 方に當りたる野山の上ふ旗の手廻と靡き其勢何程と陽に
 見えぬとも戸石村の後を廻りて味方の後を襲ふべき勢

ひまり是れ山本晴幸が斥候の小旗計畧と號して儘に百騎に足らぬ微勢を以て敵の目を驚す陣法の妙ありて夥多しく押續て行くど見えにらる村上が前隊より此體を見て武田が軍勢別小一手の新兵を以味方の後へ廻と見ゆる予若し後を取切られぬ前より晴信が旗本の勢を得て予攻蒐るべし先づ後を取切られぬ様に隊を廻せと云ふ程こそあれ村上が隊忽ち南の方へ向ひて一の難所を越へたる勢一同に引返すを晴信が旗本勢之を見るよしも憚り晴幸が謀計により敵は南頭に備へたるを夫れ味方の勝ちなる予や人々と互に顔を見合未だ戦はざる先き忽ち靄氣を立直し旗色整々として眞黒に予黒みける此時晴幸は戸石の郷の後より斜に本陣小立歸り此時を失ふべからず勝ちたる

予早々に山田備中守が二の手を結て村上が旗本へ横鎗を入れよと令しければ旗本に扣へたる諸角豊後守、安間三右衛門、曾根内匠助、教來石民部少輔、春日彈正等何れも今朝より一戦をも遂げずして戦を眺免氣を詰めたる人々籠鳥の雲中に出でたるが如く一同に攻蒐るふぞ村上勢横合を討れて總崩れとあまて逃出すを追蒐追詰首を取るふと勿れ切捨打棄にせよと云ふ予我れ一ふと進みければ村上勢思ひ寄らぬ横合を討れ一度亂れたる備へを立直すこと能はず眞平地に潮水の退くが如く逃行けば討死は多かくなども或は深田に追込れ岸より下へ落入り又は馬お押倒され味方の馬に踏殺され坂東道三十里許の大敗れといなりて逃走りにけり

奇正子曰く山本晴幸が村上勢の備へを南頭ふ廻したる
ハ山本家に於てハ之を斥侯の小旗計器と云ぬとかや然
れども余を以て之を見れば磁石謀計と云ふの更に適切
あるに若かずところハ信するなり何ぞや晴幸の小旗は
鐵片ふして村上勢は磁石に譬ふ此鐵片以て磁石たる村
上勢の此方より南に向て廻り行けば村上勢之れに付き
從ふて其頭を轉ずるは磁石の様にぞも似たり故ふ余ハ
之を磁石謀計と命じたり

○第十一節 真田昌幸

○昌幸地雷火を避けて大に敵を破る

武田信玄の再度小田原へ發行するや酒匂川に於て敵の謀
計に陥り既に危かりし折りより真田昌幸間道を廻りて敵

の本陣を襲ひ火を掛けたりしめば信玄は漸く虎口を遁れ
中頃より一轉して勝軍となりふけるが昌幸接するふ敵の
謀計ハ是れバかゞにてはあるまじ定めて深き謀計のある
ふんと存じつゝ、小田原指して予進みける斯くて北條方に
於ては松田尾張守は酒匂川の前後相摸川の戦に負け大
道寺駿河守と會合して軍議しなるに大道寺曰ふやう此度
と敵兵強くして中々當り難し此の様子ふてハとてを喰止
るふとは叶ふまじ去れば敵必ず小田原へ亂入すべし併し
あがら豫て上杉謙信とて交りを厚くまて置きたれば此度
ころは加勢を乞ひ甲府へ亂入致させなむ信玄急ぎ歸陣す
べし其時我々退討せばあさか勝利を得ざることなかうん
やと云ひまに松田答て成程夫れも一應道理ある軍慮あれ

ども我れ按ずるに酒匂川の一戦より敵兵ハ勝に乗て何の
 辨へもあく小田原まで攻來と鴻川村に陣を張て味方の虚
 實を計るべし其時に至り陣屋又火を放ち敵を塵しふ致さ
 んハ如何ふとありけるを大道寺聞て是れ誠ふ妙計なれど
 も中々其の如くハ參るまじ寧ろ田島村の此方に地雷火
 を伏置敵勢の之れに當り周章騒ぐ所を駈立なハ争でか小
 田原に亂入することを得んやと事もあびよを申ければ松
 田手を拍て是れ妙計あり然らば一刻も疾く其手段致すべ
 くとて夫れより一色表を離れし田島村ふ地雷火を伏せた
 りけり然程ふ甲府勢ハ酒匂川の一戦又勝利を得て勢ひ破
 竹の如く小田原指して押寄れば小田原又てハ北條家の
 浮沈此時にありと譜代老功の臣我れもくと馳集り防禦

の用意をなしなる中にも大道寺松田の兩人は密ふ田島村
 近邊に地雷火を伏置甲府勢押通らば塵しにせんすと計
 りしハ恐ろしかりける計策なり斯ることハも知らざる甲
 府勢は潮の涌が如く小田原指して進みなるに昌幸田島村
 の方を眺むれば陽氣炎々として日に映し以と不審く見え
 ければ昌幸早々先陣へ使者を送り精兵を留め置て自ら信
 玄の前に到り偕て小田原勢此度の軍利なくして引退くと
 雖ども小田原にも松田、大道寺などは古今ふ秀でし英士あ
 り因て端なく味方を深々と小田原まで引入れる事ハ是れ
 一計ありての事と存候怪しきと田島村に當り陽氣炎々と
 して日に映じ見えけるも是れ敵方ふ地雷火を伏せしと
 覺わたりと眉を顰めて申しければ信玄大に駭死舌を卷き

身を縮めて今宵田島村に陣を据んと思ふ所なるに萬一然
 然のことはあつた殊方一人も遣ふ、こと叶ふまじ然れど道
 を替へて發向すべしと云ふるに昌幸が曰く假令今道を變
 んどて中々通すべき敵ならねと寧ろ此道より進みし方
 然るべし信玄不審きて曰く斯く怪しき道を進まんとは如
 何あることや君子の危きに近づかずと云ふなり昌
 幸が曰く然ればにて候夫れに付某一計を按じ出し候此謀
 計もそ用ひ給へ信玄が曰く其謀計早々我れに教へよ昌幸
 畏まざ候とて聽て諸卒に命じて此度相模川酒匂川の兩
 に掩ふしたる三百餘人の者共を信玄の前へ呼出し昌幸、信
 玄の膝元に寄り斯様々々と耳語ければ信玄限りなく悦ば
 れ諸卒も命じて掩ふしたる者共の捕縛を解免させ此内に

主將たる者ありやと問ひたりふ三人進み出で、二人は弓
 頭齋藤數馬一人は鐵砲頭窪田利平治一人は同武藤新吾と
 各自姓名を申ければ信玄彼等も向ひ凡そ君臣の道は大將
 も諸卒を皆其主も報ずるをこそ義あり信ありと云ふあ
 り嗚呼汝等人の臣として死を願ふ是れ義なり汝等擒に
 せざるれども是れ決して臆病の爲す所にあらず唯運拙く
 てこそ擒とひなりたるなれば然る上へ籠中の鳥網代の魚
 殺さんも生さんも皆此信玄が心もあり然れども我れ苟も
 源氏の嫡流なれを天下の乱を治め奸賊を亡して普く四海
 を掌中に入れやと思ひ敢て無辜者を故意殺戮せんとい
 想はざるなり今汝等が主人たる北條の我が敵あれども汝
 等に罪はなし嗚や古郷にあつる妻子等接じ煩ひ晝夜涙

の乾く間もなく歎き居るらめ誠に不便の至りなり我れ之を思ひ今汝等を免し返す間古郷へ歸て無事に父母妻子を養へよやと仰せけるよ之を聞て擒の者共ハ皆地に拜伏して涙にかた暮敗軍の我々汚面々々と小田原に歸り他人も後指を指れんより寧ろ斯る仁心ある主將に降参なま犬馬の勞をも盡したくと存玄候なりと異口同音に願ひければ信玄も長涙を暮れて言葉もく指俯伏て居たり一に昌幸側より神妙なる願ひながら此陣に留まて降参せば汝等が忠ハ立たざるの道理なり夫れよと早く小田原に立歸りて吾主北條殿へ忠を盡し此恩ハ戰場にて致すべいと申しければ皆々地に拜伏して助命の御恩何時の時にか忘るべきやと躍り上りて悦びける夫れより昌幸は皆々に酒を飲

ましめ纏て擒ふせし節着せし鎧甲太刀鎗馬具等を取り袖へ渡し胸に一物ある也へ旌旗指物等北條家の目印ありて遠方に見ゆるもの興へて早々に歸れと申せに予皆々禮謝して馬に打乗悦び勇み小田原指去て歸りけるころ憐れありけることゝもなり信玄跡にて此謀計好と雖とを罪なき諸卒を無解に殺すこといと不便なりと落涙しなれば昌幸莞爾と笑ひ天下を定むる者豈に斯る小事に心を痛めんや天下の爲めに換へ難しと空囁ひて予居たりける然程に彼の放免れし小田原勢ハ勇み悦び馬を早めて歸る道中信玄の仁心を感じつ、既に田島村に指掛り先づ是にて一息繼べいと馬より下り側なる家居よ立寄りて休息するに此邊の百姓等は此度甲府勢小田原へ亂入すると云ふ沙

汰を聞き皆々近郷の山々ふ隠れ只の一人も住む者なけれ
 ば皆存分に休息し馳て小田原へ歸らんと立出で、此處を
 離れ堤防を四五丁程過ぐると齊しく一聲の鐵砲耳根に雷
 の如く響くと思ひし其間もあらず大地より火焰と一度ふ
 砂石を打揚げ四邊の一圓眞黒になりて白晝忽ち暗夜の如
 く其中ふ彼の者共ハ脱る間もあく面部手足のたらいなく
 焼爛れ見るく中に三百餘人一人も殘らぬ焼死せり不便
 とも殘酷き事ぞをなり是を見て小田原の松田、大道寺等は
 すゆふそ甲府勢陥し予那れ見よと手を拍て笑ひ悦びつ
 る時分の能きそ者共甲府勢の燒殘りま者酒匂川へ逃び落
 ん間一人も遁すなと大道寺の命に一萬五千餘騎は曾我山
 を廻り酒匂川を指して進みたる北條氏忠も同じく一萬五

千餘騎にて曾我山を廻りて徳間井より進まければ大將氏
 康父子大に悦び今や信玄の首討て来るふんと舌打して待
 居ける爰に信玄と此火の手を見るよりも山縣三郎兵衛、馬
 場美濃守の兩人其勢都合五千餘騎にて徳間井に向はせ眞
 田安房守同舍弟隠岐守の兩人の同トく其勢五千餘騎ふて
 曾我山の押へとなし雙方へ手分をしてど遣へまける者も
 此方と松田尾張守、大道寺駿河守は斯る事と露知らず揉よ
 り揉んで進む所に思ひも寄らぬ松蔭に雁金の旗二流風に翻
 然と靡し許多の軍勢整々と備へたを松田先陣に進み
 之を見て味方ふは見馴ぬ紋なりと怪む折ら若武者一騎
 其間近く動き出で、高聲に呼びける此手へ向ひしは北
 條方に智將と聞ゆし松田殿と覺えたり斯く申を某と武田

家に於て眞田一徳齋が三男安房守昌幸あり此度我々を小
 田原へ引入給ふは極めて良計のあらんと存じ先達て相摸
 川、酒匂川の兩陣にて搦にしる諸卒を先陣ふ進ませ地雷
 火の先駈致させたり然るに因て北條は方々此火の手を見
 給ひ必ず此道へ御出あらんと存じ先刻より陣を
 引て待受しにいと遅かりしこと哉唱昌幸、松田殿へ見參
 に侍受の御馳走を振舞申さんと後の方を招けられバ數百
 挺の鐵砲一度ふ動と打掛けれも松田勢は御方の計りし謀
 計は悉く騎の嘴と岩懸ひ却て敵に計られ思ひ設けぬこと
 あれば大に敗して後陣の方へと雲額ゝる大道寺之を見
 て何程の事かあらん此敵を打破り信玄の旗本へ無二無三
 に切入れと誓を並べて五千餘騎喚き叫んで攻立れと昌幸

も穂先二尺の大身の鎧を捨て大道寺に突て進る續て蘆塚
 根津、吳服、最上、望月、増田、相木、篁等の面々勇を奮て突入り大
 道寺が備を何の苦もあく切崩せしむるバ右往左往ふ亂れ立
 ち小田原指して敗走す又北條氏忠の徳間井指えて押行く
 所ふ山縣、馬場が兩軍に端なく出會思ひも寄らぬことあれ
 ば一支へも支へずして大ふ敗走し小田原指して逃げ歸り
 ける

奇正子曰く裡諺に所謂當て所と積鼻輝は先かゝ外ると
 云ふもの松田、大道寺の謂ひ耶眞田の謀計不仁なるに似
 たれども戦争と云ぬもの元來不仁なるものにして且つ
 永祿天正の頃の弱肉強食腕力世界なれを當時の時勢亦
 己むを得ざるなり然れども若し器械ふ使ふの用なくん

其搦の必ず之を殺すを欲せざること固より知る所なり然るに其器械小用ふる時機の際會したるこそ搦の者共の不幸なれ況んや其器械小用ふるの時機を造り出せしものハ御方即ち北條の人あるに於てをや余豈に辨を好んで真田の爲めに辨護せんや只其時勢の己むべからざる所以を知らしむるのみ

○昌幸虚實變化の謀計を以て大に北條勢を破る

元龜元年九月上旬に當り北條氏康、上杉謙信と謀し合せ甲府を攻免んとて各中途まで出張す此由兩方の道より櫛の齒を挽くが如く注進し來れし甲信の諸將大に驚き急ぎ登城して色々と評議あるに山縣三郎兵衛進み出で、北條勢の假令大軍にて攻來るとも數度武田の武威を知りたるこ

となればよも深々と攻來ることあるまじ臣按するも上杉勢も勇々敵なり去れば北條勢ハ智謀深き真田氏を以て之を防禦せ上杉勢ハ君自ら御出馬ありて征伐せられ其後北條と攻給へ然るべく候とんと言上を是れと日頃真田が戦功あるを嫉み憎みしを得て北條の大軍へ向はせ若し敗せば笑はんものと邪意を含としをのあり之を聞くより佞奸邪智の長坂釣閑、跡部大炊之介も此議然るべしと頻りに申ければ信玄、真田兄弟に向ひ我れ三輪に至り上杉を防ぐ間其方共ハ北條を押し我が陣まで持堪べし此議如何と云ければ真田兵部丞早其氣を察して勝敗を豫め期え難きふとあれを確言ハ仕り難しと其言未だ終らざるに昌幸冷笑ひして兄君の言ひし條過てり北條勢如きの大軍ハ某

一人の手勢にて岐度防禦仕らん上杉ころの勿々容易の敵
 あらぬば兄君も亦主君と共に三輪に向ひ給へと端然とし
 て申しられバ信綱、昌輝大に怒り陣中に偽言あり我々大
 軍ふて向ひてぎへ心元なき北條勢汝一人の手勢にて防禦
 んとは兄を聞きたる過言なき免し難しと敦固荒く申しけ
 れば昌幸が曰某何んぞ偽言を以て君を欺き候はんや必ず
 防禦んと存する故斯くの申すなり我が一命の素より君ふ
 捧げし者されバ此度北條と戦ひ防禦ぐと雖も若し力能
 りざる時の討死致そ迄の事なり斯く申せばとて死を輕ん
 ずるにあらざる君命を重んずるが故なり大敵を見て恐れ
 ず小敵を見て侮らざるは是れ兵家の習ひなれば北條の大
 軍を見るると螻蟻同然踏破て見そべりなりと常ふなき傍

若無人の答へなせしは是れ偏に山縣、跡部、長坂等の心を挫
 かんずらんが爲め斯くの申せしなれば信玄も常ふ變りし
 真田が廣言若しや討死でも致しなば如何ありと思はれ其
 日の評定ハ止まふける昌幸ハ猶も其翌日北條勢を防禦さ
 とき旨書面を以て言上せしかむ信玄訝しく思はれ昌幸を
 招かれて此度汝儘の小勢を以て北條勢を防禦きたき旨を
 願ふの意だ以て不審する所なり那なる謀計か之れあるや
 委しく語れよと云けれと昌幸謹んで仔細は軍終りて相知
 れ申べき間是非々々此段御許し下されしと何事も云ハ
 されと信玄斯くてハ定めて奇計のあらんと思ひ然らバ北
 條勢へ向ふべし然りながら長根肥後守に千五百人相添へ
 遣はすべしと申しなれば昌幸有難しとて聽て長根諸共其

勢二千餘騎北條の大軍へ打向ひけるこそ大膽不敵のこと
 もあり斯くて昌幸甲府を發向しければ信玄も亦諸軍勢
 を引き具して三輪ふぞ出馬ありたり猶て眞田安房守長根
 肥後守の兩人ハ二千餘騎にて屋敷赴け小田原勢と對陣
 す北條右衛門太夫之を見て大に笑ひ甲府勢大軍にて向ふ
 べきに僅かの小勢にて向ひけるこそ淺慮なれ一處に攻破
 れと早々に用意しければ松田尾張守入道大に制し小敵を
 りとて侮るハ兵道の誠むる所あり能く敵の舉動を窺ひ機
 に乗つて攻籠るべしと扣へたりし昌幸は別府若狹伊勢
 崎藤十郎石田郡次杯ふ命じて其夜陣中ふ明松三百はあり
 を燈を那首這首徘徊致されければ北條勢之を見て驚破敵
 夜討を掛ると覺ゆる予油断するなと用心してある所に陣

中に近づくと二町許ふして明松一時に打消ければ四邊
 ハ忽ち闇夜となり黑白も分たざるよ北條勢今や寄來るら
 んと待てども何の沙汰もあく其儘夜ハ明なれを餘り
 の訝しきに夜前明松の消し邊へ人を出して見見るに跡形
 もなく不審ながら小借て止ぬ其翌夜又々明松を五百許
 燈しつ、押寄せ來る勢ひに北條勢今宵ころ攻來るぞと急
 ぎ用意を爲す所ふ舞々と間近く攻來るかと思れば又も一
 度に消失にける斯くすること五七夜に及びければ北條勢
 ハ大に心氣勞れ晝夜寝ること叶はず心身茫然として居た
 りけり第八日目の夜は明松も見ぬざりければ扱て今宵ハ
 來ふぬ予是れ眞田が御方を怖すの謀計にして攻寄すること
 とはあらじ帯紐解きて眠れやとて前後をも知らず臥した

るふそ真田か謀計の能く當りしなれ真田が斥候此由を窺ひ濟し斯くと告げまかバ昌幸大に悦び敵我が籌策に乗りこる予今宵ふそ北條勢を破るべしとて先づ一方てハ長根肥後守一千餘騎一方は真田安房守同ヒく一千餘騎ふて山手を廻り左右二手に分れて押寄せたり北條勢今と白川夜船の寝入さかり谷鼻息の聲を聞として互に結夢の最中何處ともなく一聲の鐵砲を響す程こそあれ前後より鯨波の聲を揚げて攻寄する體ふ慌忙狼狽き太刀よ兵具よと云ふ儘に鎧を着けても胃なく繋ぎだる馬ふ打乗り鞭打つもありて上を下へと騒ぐ所へ鐵砲を打蒐々々無二無三ふ攻蒐れも北條勢一支えもあらず先きを争ひ逃出しより大將北條右京大夫氏康、左衛門佐氏忠も大に駭き今ハ戦ふも益な

し引けや者共と云ふ程ころあれ主討るれども即等之を願みず親討るれども子之を助けず我れ先きにと敗走しければ馬に踏れ人に押されて死する者山際に押詰るれ人手に掛らんよりはと自害するもありて手負討死數知れず散々になりて小田原迄引退きけるころ醜狀かまけることどもなり然るに真田方は一人も損せず敵の捨てたる武具馬具、旗幕、指物ふ至るまで悉皆取納め甲府を指して悉々と引退きまは勇ましけることなりけり

奇正子曰く安眠を妨ぐる計ハ晝日漢土に於て三國の時魏蜀漢中に兵を交へるふ當て孔明之を用ひて麴操を走したることあり又我朝に於ても楠正成天王寺に於て此計を以て宇都宮公綱の討手を引取らせたることあり然

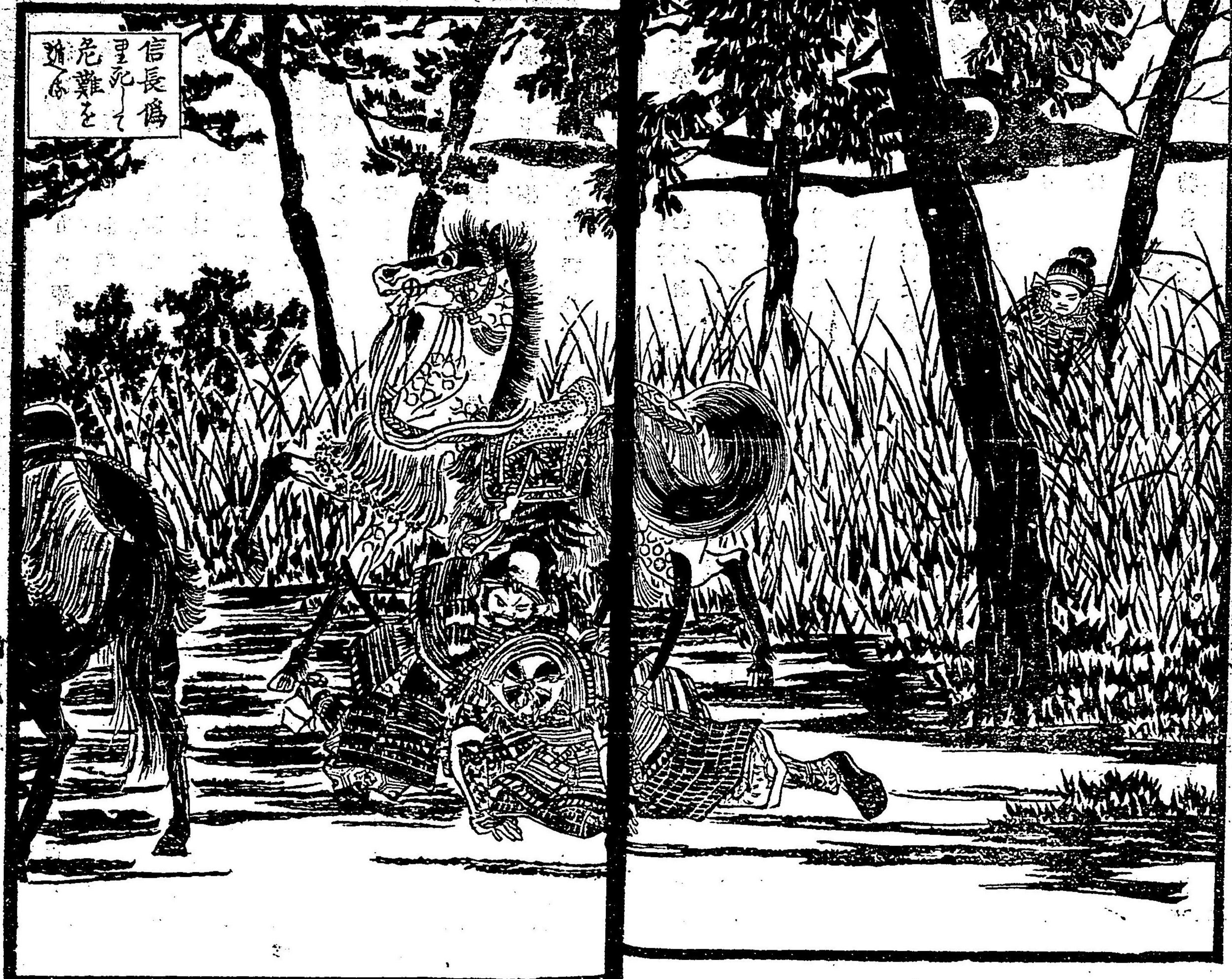
れども二家の此計を用ふるは唯だ其虚を用ふるに止て
未だ其實を用ふるに至らず故に僅ふ敵軍を引取らせた
るに止り敢て之を破るの大勝を得ず然るに今真田が此
計を用ふるに虚實變化の法を用ひて大に敵軍を敗る是
れ余が孔明、補二家の謀計を零して真田の謀計を取る所
以あり

◎ 第十二章 織田信長

○ 信長、偽り死して危難を遁る

織田信長石山本願寺を攻めしに中たびの合戦に石山方の
軍師鈴木重幸の爲先に計れて陣屋を焼れ大敗むけるもへ
信長も遁れ遁れて若江の道筋へと落懸びけるに重幸は今
日こそは是非信長を討留んものをと小具足に身を固免

士卒の體に打紛れ手練の小銃を引提げ只一人石山を出で
信長定て東の方へ走りしならめと亂軍の中を駆廻り
窺ひ見れども信長よりき者更に見えざるもへ若まや若江
の道筋へ走りたるかと跡を追ふて行きけるに偕て此方の
信長、柴田勝家と主従僅の二人あり勝家は由断ならずと八
方に眼を配り居たる所へ重幸追來りて傍らある叢の中に
身を隠し信長を臘月夜に透し見て爰予と手練の鐵砲を狙
ひ躰して切て放ちしに信長の通や強かりけん目的下りふ
太股ふ中りしかば信長アツと一聲叫んで馬上より大地に
轉落ちふけり勝家は大に驚き急ぎ馬より飛び下り介抱す
る内も若し曲者の來らんとすらんかと心を配り勞り申せど
信長更に物をも言はず身動きもせねば偕てハ急所を討れ



信長偽
里死
危難を
逃る

前
八
十
九

前
八
十
九

給ひしかと右へ廻り左へ廻り切ては士卒たりとも此處に
 あるならば曲者を捕へんものを残念ぞよと信長の耳に口
 寄せ御心を確と持給へ如何小急所なれをとて只一發小弱
 り給ふの情けなやと大地を擁ぎ齒嚙をなし無念の涙小暮
 居たりなり此方は重幸此容子を見て偕ては信長を仕留め
 たり假令一旦の蘇生するとも物十日との保つべかす日來
 の本望達したる敵兵の來らぬ内にと悦び勇み跡を暗まし
 石山へ予歸りける斯くて明智光秀敗軍の勢五百餘人を引
 き續めて來り見れば斯の什麼如何小主君信長の草の上小
 臥居て柴田一人側に泣居たりしかば光秀駭き急ぎ馬より
 飛び下り斯は如何し給ひしやと踏けれと勝家涙を拂ひ有
 りし始終を物語れば光秀も齒嚙をあらて憤り口惜涙小暮

れよける折りから信長漸々眼を見開て起り直り兩人共
 小必ず心を勞するよと勿れ我れ少しも弱らざれば安心せ
 よと云ひしかば勝家を不審に思ひ斯程御心遣ふ渡らせ給
 は、何故疾より然は宣はぬ御返答なればよと君の御身
 の上心許なく存じ彼の曲者取逃せり残念や口惜しやと致
 圍が信長笑て然思ふも道理なれ我れ太股を打れしのみ也
 へ然して患るに足らぬぞも若し馬上小堪居れば再び彈丸の
 來らんよとを恐れ態と落馬して急所を打れし體小見せし
 は我れを狙ひし曲者に打留免たりと思はせあんが爲めな
 り思に曲者は大勢にてあるまじ勝家が我が側に居なれ
 ば曲者も迂か、我が首取りふの來るまじ我が死したる
 體を見るならば仕留たりと安心して立去るべし兎角する

内味方も馳集りなんと思案して禍ひを避けるが爲め暫時
物を言はざりしなりと云ふを聞て柴田も明智も感と合へ
にあり

奇正子羽く漢の高祖の節曲者射られたりしふ
其痛若を堪へて泰然たる風を見せしとかや是れと彼れ
との至く其趣きを異にす故れば味方四方又圍繞て驚破
曲者なりと皆注意て八方を見難し居ることなれば彼の
曲者復再び矢を放さんとせまじ此時に當て其痛苦に
堪へざるの體を爲さば忽ち軍規亂れるん高祖之を思ひ
そ痛苦を堪へて泰然たる風を見せるなり然れども信長
此時高祖の真似せし重幸のアラ口惜や仕損じたりイテ
其義あると二の彈丸に打留んと二の彈丸込めてツド

と放たば如何に運強き信長とてもよも命を全ふするふ
と叶ふまじ然るを假死して重幸をして仕留たりと思ひ
しめしむ古楓を一轉して實に妙きこと云ふべけれ

第十三章 柴田勝家

○勝家、水蕪を破壞て大に奇手を破る

江州の佐々木入道承嗣を先きみ織田信長の歸路を遮り討
取ら結搦せしむ却て敗北せしを憤り又々軍勢を築め郷民
を誅合ひ五千餘人にて織田方の勇將柴田勝家が籠りたる
長光寺の城へ押寄せ四方を取圍も息をも續す攻めたりは
る時ふ元龜元年五月二十一日なり此長光寺の城ハ素より
要塞も堅固ならねを軍兵とても僅ま八百餘人にて籠城し
たることなれば更に保つべしも見ねざりけり然れども名

にし雄鬼を欺く勝家のことなれど寄手の大軍を事ともせ
 せ持口を固め矢石を飛きて防禦を戦ふ程に左右なく落城
 せしとも見えす結句、佐々木方の士卒共死傷の者多かり
 れば大將承禎家老三雲新左衛門を討て城中の水の手を
 取切り濁水せんとぞ計りける元來此城中井水なく城外
 より堀を以て水を通じければ勝家も水の手よ心而就け
 數多の兵士を守らせ猶ほ大瓶に多く水を貯へければ承
 禎大勢を以て彼の掛廻共を切落し一滴も城中へ水を入れ
 ねせ柴田の軍兵共は大い苦み天神我等を憐み給へて雨降
 らし給へと雲霓を望むと雖ども其驗なく數日雨降らず加
 ふるに夏月の炎暑焼くが如く皆々渴に悶へふし今ハ敵を
 防禦すべれ方もなく此處や彼處に伏し轉びける承禎は暗

此體を察し平井甚助と云ふ者を使者となして城中に入
 れたりける平井馳て客間に通り勝家の未だ出で來らざ
 るの前に手水を請ひけるに平井水満ちたるを小性兩人
 ふてか死出さるに平井手を洗ひければ小性殘れる水を庭
 に捨てしけり平井ハ此體を見て心中密に驚き斯くて未
 た水に苦むことなかりしよな危し併し此儘歸る譯
 小も參り給ば先づ使命を通じて歸らんと待ちのけたる所
 へ勝家出で來りければ平井ハ使命を通じて曰柴田將軍城
 を開て退城するに於ては城中の士卒悉く命を全ふし事な
 く本國へ歸らしむべし若し異議あるに於てハ忽ち大軍一
 度小菟里で隙間に攻落すべし多勢の命を思ひ早く退城し
 て然るべと聞て勝家大の眼を見開き聲を荒らげて申し

なるハ我れ荷も管城の主は頼在佐々木の鼠輩も圍れ何畏
 じとして城を開くべきや城中矢玉未だ盡きず兵糧山の如く
 用永海の如く軍兵既に一千人ふ餘れり籠城の士卒兼て必
 死を極免たるふとなれも死を見るふと其元ふ歸るが如し
 且つ我が士卒一人ハ能く佐々木の鼠輩が十人に敵す然る
 ふ寄手は僅に五千餘人なれば我が力既ふ倍す憚れ承禎勇
 氣を出して我が軍勢と死を争と、忽ち粉粹とならんもの
 をと以の外ふ氣色を損じ席を蹴たて、入りければ使者に
 立たる平井甚助は還々座を立歸ると次ぎの間へ出でけ
 るふ數多の軍兵共廣庭にて沐浴し而かも洗ひ足を浸し城
 中水の澤あること常の如し甚助之を見て大ふ驚き愈々味
 方の案もろ相違なれとて急ぎ陣所ふ立歸り承禎に云々と

物語れば承禎も亦甚だ驚き城中に井や設けぬらん又は天
 より一道の水路を通じとりしや去りて城中のみに雨降
 る所以もなし否や、夏月の雨は僅に一町を隔て、晴雨
 を異にすることあれと夜中城中のみに雨降りしものなる
 か何に致せ怪きるともなれ今一度實否を窺はせんとて
 用なき用を作り又人を代へて城中に入れしに炎暑ふ堪へ
 難しとて庭中に水を灌きたるを見て大ふ驚き平井の云ひ
 一ふ違はずとて馳て陣所に立歸りて此由を告げ、るに予
 承禎眉を頓免て想ふに兎にも角にも城中水乏しきの患ひ
 あることなれもの見えたり若し其實水ふ乏しくして偽
 りて水乏しかうぬ體を見せものなれば少しく水を費その
 ことをあし取て沐浴し庭中に水を灌く等多くの水費その

ことを爲さざるべし然るを断く多くの水を費すを見れば
 其偽りあらざるを知るふ足れり斯くては水の手を断切る
 も無益ありとて自ら備へ弛まけるよろ思かなれ去程に此
 方は城中腹心の者勝家ふ對ひ何んば城中の水多き體を見
 すとて斯くまで多くの水を費やしては愈々水に苦ん必用
 水を多く費せりとて患ふるを勝家あざ笑て敵とても亦人
 なり若し少しき水を以て欺るは其偽りなるを悟らん然る
 を多き水を以て之を欺るを假令始末の程に偽りなるべし
 と想ふも實に水ふ乏しき者が多くの水を徒に費すべきに
 ちよねば遂ふ惑ふて其偽りを信せん見よ承禎水の手備
 を怠らん然らば城中水を引くこと難きふあらす然れど
 茲に又一の工夫こそあれ之を機に一合戦なさん若し合戦

利ありて退て城を守らんになざる難きことのみあらんと申
 すふ予其人勝家が深謀に感じ日頃勝家と只勇のみの將
 りと思ひしふ其勇に優る智ありとて且つ驚き且つ感じけ
 る斯くて勝家の其夜貯へ置きし水を點見するに今ハ早や
 水瓶三ツの残りて其餘の水とては一滴もなし勝家此水
 瓶を廣縁ふ居へさせ上下は兵士を悉く集めて申まける
 は我れ信長公の命を受け當城を守る所今大軍に圍れぬれ
 ども一度も敗北の跡辱を蒙らず猶ほ能く防戦をすること皆
 汝等が命を輕んま忠戦を勵むが故なり今水の手を断ち切
 れ既ふ城中渴死せんとす所詮心を一致にして討て出で討
 死せんと思ふなり汝等日頃の信義を全ふし我れと死を伴
 ふなれば生前の面目死後の本望何事か之れに若かんや然

れども老ひたる父母稚き小兒など持ちたる者は心任せ
 に城を出で、落行くべし更も恨まとの思はぬぞ我れと死
 を同じくせんと思ふ者は此水瓶の元へ立寄り水を飲み此
 程よりの渴を濡し勇氣を増して戦ぬべしと柄杓茶器等を
 數多だせ床机に尻打掛けて扣へたり士卒共大に勇み此
 城中にて氷に渴して死なんよりは寧ろ討て出て討死せん
 と我々が望む所閻魔の廳にても氷に渴またる餓鬼なりと
 呼れんも口惜しイデヤ思ふ儘ふ氷を飲み心よく討死し武
 士の鏡となれやとて一人も落行者なく三ツの水瓶に立寄
 りて汲出して呑む程に暫時に水を飲み于しにけり勝家大
 ふ悦び率善し願をし、鎧も刀も折れるまで切り死せよ兵
 共と大音ふ呼ハッてつゝと立て彼の水瓶の元へ立寄り既

に討死と定むる上の水の貯へも無益ありとて長刀の石突
 ぶて三ツの水瓶を碎き馬引き寄せて打乗れと六月三日の
 曉き鶏は東天紅を告げ鳥のカーと三瀬に鳴き渡り東天薄
 明と白もなる總勢八百餘騎大手の城門を八文字に押開き
 山も崩るゝばかり鯨波を作り寄手の陣へ眞一文字に切て
 掛りけるよど此方の寄手未だ東雲の明けやらで夏の日の
 夜短くして蚤蚊に責められて今は夜明けの心よさと前後
 をも知らずで寝入込し白川夜舟の鼻息雷く轟々然として鼻
 より挑燈を出すもあり或は口より淡吹くもありて敵打出
 るとは夢にも知ぬ所へ鯨波聞こゆるにぞ大に驚き則ち騒
 ぎ敵味方さへ分ち兼ねたれば防禦ぎ戦ふ者一人もなく炎
 曇ふ堪へ兼ね素肌にて居たる武者もあり偶々甲冑を帯せ

しと鎗も刀も持たずして東へ走り西を靡き四度路になり
 て敗走す城兵ハ今日を限りと思ひを定めたることなれば
 日頃の勇氣百倍し切伏せ突伏せ薙廻れとさなる多木偶を
 倒すが如く屍の山を築きにり大將承禎三雲三左衛門吉
 田出雲守等士卒を命ま敵は小勢あるを廣野み出で備へ
 を立て戦へと馳せ巡て制する所に鯨江の城に残し置きた
 る鯨江相摸守高瀬刑部木下秀吉の爲めに城を乗取られ士
 卒諸共散々になりて逃來り軍の始終を物語れば承禎今は
 足なへ身しびれ三雲吉田に扶けられ石部指してぞ逃行き
 ける大將此の如くなりしかば誰か踏止て戦ふ者あるべし
 やいとゞきへ周章て騒ぎし士卒郷民等今は風は木の葉の
 散亂が如く四方八方へと行方なくぞ逃げ失せてけり此方

は勇みに勇まし城兵共愈々追討つ程に首を取るふと三百
 餘級十分の勝利を得て凱歌を揚げ勇も悦んで城中へ引き
 退さけるは珍しきことなる

奇正子曰く柴田勝家が永瓶破壊の一條諸史皆を勝家が
 謀計の皮相を記して未だ其深謀のある所を記さず今本
 書ハ其深謀を記しぬ

◎第十四章 鈴木重幸
 ○重幸稻苅陣

織田信長石山本願寺を攻めし時石山に楯籠りし者五萬三
 千餘人の多し及ひしもの兵糧に乏しく下間頼藤之を患
 ひ軍師鈴木重幸に向ひ其難儀の趣を語り今幸ひ稻苅せし
 時節なれば早く苅取て準備なさんと云ければ重幸聞て十

日の内ふは信長必ず退くべし然のみ勞せらるゝに及ぶま
 じと云へば下間我々の兎も角も士卒は今日よもあれ信長
 急ふ押寄することもあらむ兵糧の貯へ少なきを案じ戦ふ
 義勢なかるべし味方の心を休むる爲免少々ありとを苅取
 らせ澤山に苅取りしと披露し其勢ひを付けん如何やと
 勸むるにぞ重幸無益とは思ども家老が強て申す事故辭と
 もなす御尤の仰せなり然し卒爾に苅取らば人數を失ふ
 べし下間然らば如何又準備を爲さば或は謀計もあらば授
 け給へ重幸が曰く先づ苅田せんハ澤井堤の邊なるべし彼
 の邊を苅すん時信長の斥候見付けあば先日以来屢々打敗
 けたる腹立ちに無二無三に討んとすべし之を防禦んにハ
 究竟の兵三千許を堤防の此方小伏置に旌旗指物を數多立

てさせ苅田の人夫五百人に脇目も振らず苅取すべし偕て
 敵川を渡らば苅田の人夫を繰引小退かせ伏兵の輩斯様々
 小計ひあは敵敗軍をべしと委細令なしければ頼藤大に悦
 び一族下間按察使法橋頼龍と武勇勝れし者なれば是れを
 大將とて謀計を傳へ人夫五百人を授け伏兵二千人に鈴
 木孫市志摩與四郎を大將として準備なき時下間頼龍重
 幸に對ひ伏兵の處小旌旗指物等を立て敵に之を知らしめ
 給ふ如何なる謀計にや重幸答て是れ予即ち虚々實々の
 法にて旗印を立て苅田をる時ハ敵疑ひを生じて進ま得ず
 然れども其中小少く物を辨へたる者は是れハ我々を疑
 へせ其間に苅田せんと計畧あつん軍兵ハ在るまじと云
 ひ又は或者は此苅田は詐りふて味方を欺引ん爲免なるべ

一迂濶に掛るまじなき衆議區々にて隙取り候はん其内に
 味方稻を大半苅取るべし又無法の族ありて無體小川を渡
 り討て蒐るば豫て教へたる如く人夫を先とし慌忙めき逃
 歸らば敵兵旗印を奪ひ取り扱てころ詐りにてありしよな
 早く駈付けなを逃まじきものと心誇らん其所へ伏兵
 起て鐵砲を打掛けあば何程物馴れたる族あまを一旦ハ
 驚き騒ぐべし然し時を遷さは敵の加勢来るべけれを唯敵
 を川中へ追入るのみにして早々に引上ぐべしと令しけれ
 ば頼龍大に悦び勇み進んで打立ちけり頃ハ元龜元年九月
 十二日の早天鈴木孫市志摩與四郎は二千餘人を引卒して
 下間頼龍を先きふ立て澤井堤の南の方に旗印を押立て少
 し退きて茂ミの中に埋伏して予相待ちける斯くて下間頼

龍は澤井堤の傍に到り五百人の者ふ繩録を持たせ登り
 し稻を苅取らせ手々に之を抱けて城中へ運び入れ既に二
 時餘り苅りなるに案の如く織田の斥候の兵之を見付て早
 々天満の森へ注進しけるふ先日以來恨みを含みし若手の
 者共此事を聞くと等しく大將の令を待たず石山の門徒
 等味方を侮る條憎き舉動のあ宜し其義あらば一人も殘さ
 ず討ち取れど二千餘人の軍勢馳出し澤井堤の此方を見渡
 せば石山勢四五百人討り餘念なく稻を苅取り居る也へ扱
 てころと織田勢急ぎ川を渡らんとする時一人の兵止めて
 左の方に旗印を立てたるハ定めて敵の用心あらん驚忽よ
 掛らば不覺を取らん暫時見合せ然るべしと云ふに予各々
 心附少しく猶豫せし小賢き者進み出で能々見るに軍兵

は居らず唯旗をかり立て味方を迷はせ其内小稻と蒔んと
 の謀計あるべしと云へば又一人頭を掉り否々短見こと勿
 れ稻のみ蒔取んとするならむ斯く器々敷そべき様はあし
 是れは正しく謀計ふて味方を誑き寄せん方略なるべし我
 々此處に來れども恐るゝ體なきと敵の謀計に相違あしと
 互小危殆み躊躇ふ内に石山勢は飽まで稻を蒔取り堤防の
 上に休息し或は打臥しなごして傍若無人の有様あれば織
 田勢此體を見て我々が此處にあることを知りながら斯る
 舉動をなすこそ奇怪なれ争で其儘に歸すべし白晝のこと
 なればよも伏兵もあるまじ無二無三に川を押渡り奴們が
 膽を取挫ぎ一人も殘さず討取り吳ん覺悟して對はんは何
 の恐るゝことあるべき兎角隙取りあは十分小蒔取れん

急げくと血氣の若者共二千餘人一同小川を渡り矢庭に
 蒔田の者に討て掛れば石山の入夫等周章騒ぎ蒔りたる稻
 をも其儘打捨て繩鎌等も持得ずして蜘蛛の子を散らすが
 如く逃失せければ織田勢勝に乗て勇み進み此儘歸らんも
 本意あらねば用心に扣へたる石山を討取んと直々ど押寄
 するふ一人も居らず唯旌旗指物のみ立てたれば諸軍大に
 笑ひ扱ては詐りにてありけるよあ我々疑ひて遅刻し討漏
 しむるこそ残念なれと義勢抜け引返さんとする所に左右
 の簇みより石山勢鈴木志摩顯れ出で鐵砲の筒先揃へて雨
 霰と打懸けしかば織田勢何んぞ驚かさらん驚破敵の謀計
 小陥りたりと狼狽なご川を渡るとするを石山勢後よ
 り突立を々勢ひお乘て追直れば始めの廣言とこいやら前

に跨りしに似もやとす我れ先きふと逃走と一度に川へ追
込れ流れ死する者數知らざりけり

奇正子曰く虚と思ひを實、實と思ひば又實
虚々實々其深謀實に測り知るべからざるなり興田幸村
も亦稻苅陣あり彼是其所爲異なれども其妙は同じ死な
り然るに孫市、與四郎と勝ふ乘て織田勢を追蒐しかる中
頃より一轉して石山方の敗軍とはありぬるかれ去れど
斯は重幸の命を用ひざるの爲す所にて是れも亦重幸の
先見ある所なり

○重幸の敵ふ計せしと見せて其實却て敵を計りし
妙計

織田信長の石山本願寺を攻るや石山方の鈴木孫市良因と

難波の砦を守り居たりしに織田方の原田備中守手勢五百
餘人を以て不意に難波の砦に予押寄せたり原田は是れ迄
織田方の屢々敗せしと軍勢多くして進退自由を得ざるが
爲めなりと察し我が手勢を以て向ふには進むも退くも
自由なれば敗軍をべき氣遣ひなしとて斯の小勢にて押寄
せたるなり此方と鈴木孫市八百餘人ふて去年より守り居
けるが隙て鈴木重幸より五ヶ條の謀計を書記して與へ
れ時に臨んで行ふべしと教へける故僅か八百餘人にて守
れども終に敵を近付けず能く防戦なし居る小今日しも
原田備中守が寄来るを見て敵の軍畧を試さん爲め打て出
でしが備中守は聞きしに優る勇士なれば容易く敗軍す
べきものなると疾く孫市に見究めける又備中守も敵の

様子ようすを窺のぞみて一謀計いちぼうけいを案あんじ出し此こ無體むたいに攻うんとせば數多おほの味方あひまを損こせん依よて故ゆゑと叶かなぬ體たいに持も成ちし逃走にげらるる敵てき必ず追來おそるべし其時取とて返かへして之これを破やぶり彼のかの砦とりでへ付入つ入いにせんと味方あひまふ令して暫しばく戰たたかひ態たいと敗走やぶなしけれども孫市まごぢ思慮しりょ深く追討おそあざば付入つれんと追おはずして砦とりでふ引入ひり重幸しげゆきが授まけし五ヶ條ごがじょうの謀計ぼうけいの内うち其一そのいちつを用もちひて敵てきの膽いそを取とり控ひぎ吳ごんずと夫々それぞれ謀計ぼうけいを教しへて待つまちつに原田はらだは斯かる謀計ぼうけいありとは夢知ゆめちらず再びまた咄うと押寄おしよせ來きり様々さまざま惡口にくを吐はきければ鈴木すずき怒いりし體たいを顯あらし打うて出でて戰たたかふ原田はらだ勢いきほの前まへの如ごとく詐いつはりり負まけ這々はたはの體たいふ逃行にげく鈴木すずき勢いきほの何處いづまでも追お駈かくる原田はらだの敵てきを十分じふぶんに欺引たぶらかし思おもひ驚破おど取とて返かへせと令しずれば五百餘人ごひゃくごじゅうにん一度いちどに咄うと引返ひし縱横たうごう無碍むがいに駈立かけてける

に鈴木すずきが軍勢いくさの狼狽ろうたい騒さわぎ普ふ八方はつぱうへ散亂さんらんし大將だいじやう鈴木すずき孫市まごぢも這々はたはの體たいにて砦とりでにさへ入いることの叶かなはず僅わずに道みちを求めて逃走にげる備中守びいちゆうしゆの思おもひの儘まま敵てきを追散おし難がたなく砦とりでを乗取のりて先敗さきの耻辱ちしよを雪ゆききとりと諸士しよし共とも勇ゆうみをあし休息きゆうせんとする所ところふ思おもひかけなき砦とりでの後のちの方かたより大勢だいせいの聲こゑにて援たす駈かせし原田はらだの軍卒いくさ五百餘人ごひゃくごじゅうにんを囊ふくろの中うちへ追込おとり一人ひとりも殘のこさず討取うと大音おほに呼よはり鐵砲てつぱうを打うて懸かしかば原田はらだ勢いきほ大おほに驚おどき偕ともて敵てきの謀計ぼうけいに陷おちたるか疾はやく此處こゝを退ひけよと五百餘人ごひゃくごじゅうにん慌あわて忙いそぎ取る物ものを取とり取とへず我われれ先まきに逃にげ出すと見て最初しよじゆ八方はつぱうへ散亂さんらんせし鈴木すずきが軍勢いくさ此處こゝ彼處かゝよと現あられ出でて狼狽ろうたいする原田はらだが兵へいの後のちより鐵砲てつぱうを放はなちかた黒煙くろえんの下したを潜ひそり切き伏ふする程ほどに原田はらだ勢いきほ討死うち負夥おほ多おほしく殘兵のこ共とも道々みち逃去にげるを

孫市三百餘人にて一勢に追駈け大將備中守を討んとす原
 田は味方の討れしを無念に思ひ只一騎引返し死物狂に切
 て廻るに偵勇功の者なれば孫市が從兵切立てられ近寄る
 者あふぬバ備中守猶も死力を盡し勇み進んで戦ひける
 を郎等塙喜三郎箕浦武右衛門駈來り今此處ろに討死し給
 んは恥辱を重ねる犬死なり一先此處を退きて其上へ計
 畧を還らされ今日の耻辱を雪ぎ給へと無理無體ふ引長せ
 バ原田ハ無念あれども詮術なく諫めに従ひ引退く鈴木孫
 市と強て追ハき敵の捨てざる鎗、太刀、物具、馬旗印迄分捕し
 て不時の徳を得たりと悦び勇んで密ふり入りける是れ
 ぞ鈴木重幸が謀計にて砦の後より聲々に呼はり空鐵砲を
 打懸け然も計畧のある體に思はせ敵の膽を冷させしなり

奇正子曰く味方の他ふ行かんとする時謀計を書記して
 與へ時ふ臨んで行ふべしとの計策ハ孔明の常ふ用ふる
 所にして今重幸亦之を用ふ嗚呼其地を遠ざけ其時を隔
 て後來の變動豫め測るべからざるをも尙ほ能く其計り
 し謀略の圖に當るや此の如し然れば其時其地に其人あ
 りて自ら謀計を運らさば敵を破ること亦推して知るべ
 きのみ恐るべし

○重幸、兵糧を獻すと詐りて信長の陣屋を焼討す
 織田信長、石山本願寺を攻めし時石山方鈴木孫市、志摩與四
 郎の兩人ハ軍師鈴木重幸の指揮に依て木津、難波の軍勢一
 千餘人を從へ我が故郷紀伊の雜賀に到り諸方より數多の
 牛車を集め燒草と焰燧を俵へ詰め之を車に積み信長公へ

兵糧を獻ずると詐りて運び置き一時小火を掛け信長の本陣を焼立んと謀りけるが此地は本願寺の門徒共多かりければ百姓等我れもくんと手傳たるふぞ日を出でずして整ひしかば鈴木、志摩の大に悦び今やくと待居る所へ石山より重幸が使者書翰を持來り猶不口上にて委細を述べければ鈴木、志摩と領掌まで彼の謀計既に成れり急ぎ率行くべしとて車百餘輛ふ件の儀を山の如く積重其餘の馬に負せ兩人之を宰領して大坂天王寺を指して予急ぎける馳て信長の陣屋ふ到り是れに紀州和州の御家人より信長公の命ふ依て兵糧米を獻せん爲免運送せりと云入れれば留守居の輩僞りとは夢にも知らず先達て仰付けられしことなれば定免て夫れならんと大に悦び早々陣中へ運び入れ

よと指圖なしにれを志摩與四郎心得たりと士卒に令し織田方の士卒には決して手傳せず我手の者のみにて陣中へ運び入れ思ひの儘に程能所へ配置せらるに留守居等の計畧との露知ら終に何れも鳴謝々々緩々休息すべしと云へ石山勢大に悦び陣外に屯して暫らく息を休免けるうち既に其日も薄暮ふ及びしれば志摩時分好まど五百餘の從兵ふ令して件の兵糧と見せたる儀に片端より火を付れ一時に陣を揚げさせたり此陣に佐久間甚九郎儀の勢ふて守り居るが陣の聲に驚き駈出て見れを彼の兵糧を積置きし陣小屋より火燃上り折りしも南風烈しく暫時に小屋々々へ火移り黒煙の下より陣を作り陣中を切て廻る敵兵何程と云ふ數を知らねば織田勢大に騒ぎ立て火を防ぎ敵

を支へんと四方八面を駈廻れども小勢を云ひ夜に入て何れを敵何れを味方と見分難ければ途方小暮れて討たる、者數知れず火の彌々熾んふなり本陣一時に燒失せてけり此時信長の既に引退んとしなるが天王寺の方に當て火の手上りなれば是れのを將士驚く折柄士卒共慌しく駈來り事の始末を落ちもなく注進まなれを信長始先諸將等驚き驚破大事ころ出來たりと見る内に火焰天を焦しけるゆへ爾もの信長も仰天して怒りもやらず諸將に何の令もなく急ぎ馬小打乗て駈出しけれを諸軍を續て走り行く小鈴木孫市俵を積とよる數輛の牛車を信長の引返を道筋へ押出し馬の背ふも負せ一面に牽列ね織田の軍勢は近寄るを見るより俵に火を懸くれば宛然火事を以て地獄道を塞ぎと

る如く恐ろしなんぞ云ふばかりなり又是れと一時に馬の背ふ負せたる俵も火を附くれば馬は驚き狂ひ猛て織田勢の中へ駈入りければ織田勢之れが爲先に七轉八倒して右往左往に散亂す信長も叶ひとや思ひなん後れ方へ引返さんとするに慌忙めき逃廻る味方の士卒が邪魔小なれば東西を分たす減多走り小道ある方へ駈行きけるに彼の車小繁ぎし牛の繩燒切れたれば牛の苦しき儘角振立て駈廻り人馬の別なく角に引懸け突立てける程小猛火の四方八面に廣がり日來の主君の命も代らんと思ひし者も火炎小胃され其身の苦しきに主人の所在をも知らず狼狽廻りて逃走るの随分其見苦しかりける有様なりけり奇正子曰く兵糧と詐りて其實火藥及び燒草を積みて敵

を焼討んとせし謀計の古來漢士ふ於て屢々用ふる所な
 れども何れも皆敵の爲めに却て其反を計れて敗軍せま
 ことなれば悉く之を略しぬれども今鈴木重幸の能く敵
 を欺き果せるを以て之を記を然れど其能く敵を欺き果
 せるは是れ重幸の手術古人に優る所ありて然るか將た
 敵の愚なるに因りて斯くの欺き果せるか开は知らぬど
 も時の都合善く行きしものとあろ知られたり

○重幸奇計を運らまて毛利家より兵糧を借る

織田信長の石山本願寺を攻るや石山城中の固より寺院の
 事にして俄に五萬餘人の楯籠としみとなれば何分にも兵
 糧に乏しく此分にては籠城の叶ふまじ何ふどの兵糧を得
 ばやとて種々工夫の末鈴木重幸の計ひにて毛利家は當寺

主顯如上人と所縁深きことあるを毛利家に就て兵糧を借
 りんとて一色五郎左衛門常廣が手下の者にて西國筋の案
 内知りたる者二人に書翰を持たせて打立せける密使の重幸
 の計ひにて商人となりて堺の浦より出船して中國へ越く
 に開所々々ふて商人船なればとて問者の乘組居んも計り
 難しと種々吟味せられ荷物衣類まで改められけるが諒て
 重幸が計ひにて密書は竹杖の中へ仕込みたれば雖ありて
 知る者なく越州小笠原に到るに毛利家の役人に便
 り本願寺より使の由を申入れければ則ち廣島の城下に指
 きて使の返きを諮る小彼の男竹杖を割り鈴木重幸が認め
 し密書を出し差上げければ家老中之を大主と奉るに毛利
 輝元披見ありて吉川小早川ふ此書を見せて謀るに不兩人

之を見るに兵糧を運送する手術をも最と細々と書記あれ
 ば兩人大小感じ斯る智將の城中ふあれとこそ信長毎も勝
 利を得ざるなりと詞を納へて申しけるは本願寺上人の先
 君元就公御歸依と云ひ殊に公方足利義昭公を介抱して送
 くられし縁もあれは旁以て此度の難儀救はずばあるべか
 らず乞ひに任せ宜しく兵糧を送られて然るべまと申聽る
 に予元則ち吉川、小早川兩人へ宜しく計ふべしと命せら
 れければ兩將心得て兵糧數萬石を七百餘艘の船に積み又
 三百餘艘の兵船に飯田越中守義信を大將として二千餘人
 を従へさせ村上八郎右衛門景廣、兒玉内藏元助、村上又左
 衛門春忠、遠藤左京、田所甚左衛門、有地民部少輔等を舟手の
 大將とま重幸の謀計の書を越中守に授け必ず誤つふと勿

れと申付くるに飯田領事ま聽て廣島を出帆し瀬戸竹原を
 過ぎて備前を漕渡り日ならずして播州室の津ふ着船しけ
 れば此處にて越中守の物馴たる兵士を小舟に乘せ川口の
 容子を窺ひしむるに織田家の番船三百餘艘押並べ用心嚴
 しく守り居る由注進ま來れるよぞ飯田の播州室の津の遊
 女を數多譚ひ十餘艘の小舟に乘せ兒玉村上の輩是れに附
 添川口ふ漕到り織田家の番兵等が乗りたる船に漕寄せ御
 徒船のね伽を參らせんと申しなるが時しも七月下旬にて
 殘暑焼くが如く終日暮し兼たる番兵共夜風に肌を寛げん
 折柄あれば大よ悦び雀躍なし密々聲にて彼の遊女を招き
 呼入れ内々ふて娛み遊び居けるを聞き傳へて大將分の輩
 を此處の水上のことなれと氣遣なし石山勢出てたりとも

陸の装には味方あれば案を散さん
 とて我れもくと遊女を招きける也へ船毎ふは行届かず
 藝州勢故と今晚て試みに参りしなれば女共を此後は數多
 迎参るべしとて村上、兒玉の輩辨舌ふ任せて咄しければ番
 兵共然らば此後は斯様の女を連れ来れよと口々已が隨意願
 るける也へ兩人之を請合て其夜の遊女を引連れ歸りけり
 越中守此動靜を見聞えて信てるを謀計成れりと悦び明晩
 の必ず兵糧を石山へ運び入れん川口の斯々と諸將等小謀
 計を致へ小舟百餘艘に究竟の兵一千餘人を乗せ鐵砲數百
 挺持せ苦を覆ひ遊女を乗せたる舟を見せ兵糧船諸共又天
 正四年七月廿六日申の刻室の津を出船して大坂川口へ不
 漕行きける折り去も風烈しく順風なれば左邊は須磨明石

右邊は淡路松ヶ島兵庫神戸を時の間に漕過ぎて兵糧の沖
 中ふ扣へさせ小舟の三百餘艘大坂川口へ漕寄せけるが此
 時ハ早や戌の刻をかり暗夜なれを火を點さず敵船の灯影
 を目的にして漕來る斯くて織田方の番船の聲隠て約せし
 事ゆへ暮方より遊女の來るを今やくと一時三秋の思ひ
 をなして待ちたる所小數多の小舟漕來れを偕てころ遊女
 を多く連れ来りしぞと悦びて此處へくと手招きければ小
 舟ハ漸次に漕寄せける番兵共漕を流し彫立現れ悦びと
 して餘念なき所へ百餘艘の小舟一時小苦を剗除け鐵砲の
 筒先揃へ嘸や待詫給ひけん遊女ハ是れにて候なると雨原
 の如く打立て忽ち番兵數百人を打倒し矢庭に敵船へ乗移
 り陣を作て切廻り一かば遊女を待居し狼狽武士防禦んと

する者一人もあらず、鎧を引上げ、腰を切て逃走しようと急燥さ
も俄かの事故自由ならず、城の取へなく殺され又は水中小
飛入て命限りに遊ぶをあり、周章狼狽大方あらざりけり之
を聞て住吉の濱手よりは、眞鍋七五三、兵衛、沼野、傳内、五十餘
艘の兵船に三百餘人の軍勢を取乗せ、息を切て漕來る、又尼
ヶ崎より荒木、攝津守が兵一千五百餘人、三百艘の兵船に
打乗り押來り、藤州の小舟を中に取込、打盡めんと漕廻る、此
めし、小因り、亂軍の末遂に織田勢敗走しけるにぞ、兵糧は雖
なく、城中に予選入れふける

奇正子曰く、何處まで討るとも、其先きを討らねと、其先き
よと仕損ずることあるを、免れず、石山より毛利家小兵糧

を借るゝに當り、其運送方までを、書記すは、ナト無禮の
嫌ひあき能はずと、雖も重幸事の先死より仕損んせん
ことを患ふ故に、無禮を忍んで、其事をまでも書送れるな
り、嗚呼、先きの先きまでを思ふて、一も殘る所あき、能く
念の入ること、ふその感するなり、若し重幸をして、善き
武將小事へしめて、長く戰場を往來せしめたらん、ふの奇
謀妙計、擧げて、數ふべからず、殆んど本書全卷の半ばを占
し、なうん、然るに、惜哉、主君とせし、佛僧にして、殺戮を思
み、常に多く敵を殺せ、勿れと命せられて、あれ、己が智謀
を十分に用ふることを、能はず、然るも、尙ほ且つ其見るべき
奇謀妙計のあるや、此の如く、嗚呼、惜哉

◎第十五章 豊臣秀吉

○秀吉、義元の氣質を推して謀計を設く
 永祿三年五月の頃、今川義元駿、遠、参、三ヶ國の勢五萬餘騎を引卒し上洛せんと企て其序でに路々の敵國を悉く踏潰さんずとの意氣込にて漸々東海道筋を登り尾張小指掛りに國主織田信長の氣質烈しく味方の勢を僅かに三千人小過ぎすと雖も降参するの氣ハ毛程も無く是非に一合戦せんと云を諸將皆不安心に思ひ衆寡敵せずとて諫れども更ふ聞き入れず馳て軍評議に及びけるに豊臣秀吉未だ木下藤吉と云へ一頃あるが進み出で、義元大軍にて攻來る味方小勢を以て當ふんふハ豫め備をあすべし先づ鳴海の邊り鷺津、丸根、善祥寺、中島、丹下、等の切所ふ七ヶ所の砦を築き二百騎三百騎の勢を籠免置た敵の大軍を分ち小勢と成

して戦ふべし敵の勢を以て味方の勢は二十倍に過ぎたるべし去れば何れの砦を攻るとも皆大軍して向ふべし等閑にては當るべかはず籠城の將士必死の戦ひをなし手痛く防ぎ戦は、義元の氣質短慮にして氣を苛ち益々大軍を諸方の手へ指向て一時小攻落さんとするを疑ひなし然らば軍勢ハ皆前集りて後の空虚となり所謂龍頭蛇尾又は幽靈の如き軍立となりしも尙ほ知らず七ヶ所の砦を踏潰さんると目前にありとて心騒りて何の備へもあかるべし其時君にハ退兵を撰り問道を経て義元の旗本へ攻入あつたばなごか義元的首を得ざることかあるべきと事もあげに申しければ信長尤も同じ此謀計は従ひ人夫を分け七ヶ所の砦を築た兵士を籠免て義元の大軍を防んとす

る其心こそ不敵なれ然るに藤吉の熟々と諸士の容貌を見
 るに今度の合戦味方小勢なるを以て必定の勝利見果なま
 と危おみ想ふ氣色小見ぬれば斯くては合戦勇みあかる
 べしと察し一ツの密計を案じ出し江州の佐々木六角義秀
 同義賢入道承禎に援兵を乞ひ其勢を合はせて今川勢に當
 るべしと申上自ら從者四五人を引連れ江州指してと急ぎ
 ける藤吉は初矢より六角の援兵を出すとなたを察し幼
 稚の時知りたる尾州海道郡峰須賀村小住をる者にて諸國
 の野武士一千餘人を集めて日の目を忍び月夜通ふ白浪を
 所業とする小六政勝と云ふ者の住宅に到り對面して某使
 命を蒙り今江州小赴んとする所あれと密に計るに義秀柔
 弱にして承禎入道決断の氣力に乏し故小多くの助勢の事

調ふまじ足下此時手下の野武士を悉く集め江州の援兵も
 りと披露せば織田の軍勢氣力を直し戦ふは勇ん此信足下
 の助勢を頼む由語をいれむ小六仔細なく願承し日限を
 定め越知川の邊りにて出會はせしめて申合はせ藤吉の
 江州へこゝろへ行たより藤吉懸て江州六角の許小至りて
 助勢の主命を述べむかとも察じに違はず助勢の事を背は
 ねば其足旗指物弓鐵砲の軍器二千拜借の儀申入れしに
 不流石小是れまでをも所り兼たると見えて承知に及び
 なる藤吉は甚だ悦び恩を謝し懸て尾州へ歸りける時小兼
 て申合はせし小六が一黨約束を違へずして其勢一千三百
 餘人越知川へ出迎ひしれは藤吉大に悦び伴の具足を着せ
 旗指物を押立て江州の加勢なりと偽り勇んで入國しけれ

織田家の諸士の言ふも更なり領分の百姓に至るまで大
 に勇み立ち今川が大軍恐るゝは足らずと躍り揚りてを悦
 びける斯くて織田方防禦の術を備はると等しく今川の大
 軍揉に揉んで押寄せ來り一時に踏潰さんずとの勢ひよて
 在々所々放火して進むにぞ鷺津丸根等の砦の敗と今や踏
 破られんと安き心ぞなかりける然るゝ大將信長は少しも
 驚き騒がず其夜諸士を召されて酒宴を成し軍の評議會て
 亦く漸く酒酣りて福宮大夫を召され猿樂を仰付けられ信
 長自ら扇を開き起て舞ひ古謡を謡ふて曰く人世幾か五十
 年外典の内を觀ぶれば夢幻の如し生ひれば斯に死あり一
 たび生を受けて滅せぬ者のあるべきや壯士將と何んぞ恨
 んど押かへし〜再三謠ひ舞ひ了りて甲を被り馬に上

り單騎鞭を擧げて出づ騎の能く屬する者僅に十餘人漸く
 熱田明神ふ及ぶ比數百人といふにける時に藤吉、信長の
 前に進み出て言上しけるは當時大明神は日本武尊を祭る
 社なれば東國の戎兵を討伐し給ふふは神拜ありて然るべ
 し信長之れも從ひ馳て神前に恐拜し一紙の願書を捧げら
 れ祈禱をこらそ所に穴不思議や社檀の内に響の音勇しく
 聞へ白鷺二羽東へ向ひ飛行きけれを信長、藤吉大に勇み當
 社明神の奇瑞眼前に著明し今川を討て織田の運を開かん
 ると此一戦もあり勇めや者共進めや者共と合されは今ま
 で今川が大軍に恐れ氣勢なかりし士卒までも斯る奇特を
 見る上からそ此の合戦味方の勝利疑ひなしと忽ち勇氣百
 倍し勇み進んで打立ちける是れも亦藤吉が計策よて諸軍

を願ふ功を立んとて、謀て社士等の中合め、催さたるゆへ、偕て
 去るの奇謀を顯はせしき、去程、信長は軍勢を引奉、笠
 寺の東なる細腰を搦めに、搦んで馳行けるが、東、小當て、鷲津
 郡、根早や落城と見え、て黒煙り、夥しく、空、小環、響きければ、信
 長、猶ほも馬を飛ばし、紫々の味方に、使を馳せて、其兵を引具
 し、信長の旗指物を、丹下の、柴田勝家が陣中に、殘し、信長
 も亦爰に出陣の體を見えて、問道より進みけると、義元、露
 知らず、緩、三時ばかりの間に、五ヶ所の砦を落したれば、義
 元、尤は悦び、在て、あふん、すふん、餘る二砦も亦、腰間に、落す
 と、待ち、し、お、變じ、し、二時、ハ、息と、稱せられし、柴田勝家の、守り
 し、砦、まれば、容、駭、落ち、ざるの、ど、か、却て、勝家の、爲、えに、切り、崩
 ざる、の、存、様、は、て、斯、く、と、義元へ、訴へ、げ、れば、義元、尤は、憤、り

信長小兒の分際として我が軍勢を討ちたること奇怪の至
 りなり、急ぎ勢を増して丹下も追ふせしに、ぞ今は義元の本
 陣に、殘る者、僅に一千餘りと、予なりける所へ、信長、摩て、斯く
 あらんと、藤吉の計ひによりて、進みける内、信長の、速、る、強
 かりけん、一天、忽ち、かき、曇り、大雷耳を、ツシ、裂く、計り、轟々、と
 して、四方、ふ、鳴り、渡り、大風砂を、飛ばし、木の根を、穿ち、大雨、盆
 を、流すが、如く、人馬の、音、更に、聞、え、ざる、こと、義元の、速、の、體、き
 ぬる、時、節、と、ころ、は、知、り、れ、ぬ、り、藤吉、鎧、を、踏、張、味、方、小、向、ひ、此
 風、雨、も、そ、以、藤田、明神の、神、風、なる、や、進、め、や、と、令、を、る
 小士卒、又、一、層、勇、んで、進、む、義元の、旗、本、へ、無、二、無、三、に、切、込、り、
 今、川、勢、不、意、を、討、れ、大、小、驚、き、狼、狽、騒、ぎ、戦、い、んと、す、る、者、も、
 我、れ、先、き、小、と、敗、走、す、織田、方、服、部、小、平、太、進、んで、幕、中、に、入、て

義元小薄り鎧を捨て突き出す鋒先義元の太股を貫けたり
 義元太刀取延て小平太が片足を打切り猶も進んで戦ふ
 所を毛利新助後より無手と組付き短刀を以て脇腹を指通
 し終に組みしき動らさず此時義元新助が左の指に嘴付け
 るを新助之を事ともせず遂に首を打落し太刀先地に貫き
 て指上げたり借ても丹下の観ひと今を最中と挑むし所へ
 大將今川義元の首を太刀の先きに貫け織田信長自ら本陣
 を攻破り義元を討取りたり今と誰の爲先に戦ふぞや早く
 降参して助命を蒙れと聲々に呼ひりければ今川勢肝を消
 し魂を失ひ這は如何にせん淺ましやと狼狽騒ぎ右往左往
 小散亂し總敗軍となりなまふなる
 奇正子曰く藤吉が義元の氣質を推して謀計を設けたる

の孫子の所傳彼れを知るものにして藤吉固より無事な
 れば學問に於て兵法を知らずと雖も生れながらにして
 自然兵法に通じ斯くは計りとなり又織田明神に於て
 奇謀を顯はしたる計ひあまは能く兵氣を鼓舞するの妙
 を得たるものふまて當時にありては實に奇策と云ふべ
 き然れども今日に及んで窮理學問をしを以て最早斯の
 如き事ハ用ふべからざること、そなりぬれ兵家宜しく
 察せざるべからざる也太公曰く大風甚雨ハ前を搏ち後
 を擒にする所以ありと桶狭間の役自然此法に當れり
 ○秀吉奇計を運らして箕作城を抜く
 織田信長の江州佐々木六角を攻めんとするや和田山、箕作
 の兩城は江州の咽喉ふして佐々木六角家の頼とする所

義元小淵り鎧を捨て突き出す鋒先義元の太股を貫たり
 義元太刀取延て小平太が片足を打切り留りも進んで戦ふ
 所を毛利新助後より無手と組付き短刀を以て脇腹を指通
 し終に組みしき動らさず此時義元新助が左の指に嘴付け
 るを新助之を事ともせず遂に首を打落し太刀先先に貫き
 て指上げたり借ても丹下の暇ひと今を最中と挑し所へ
 大將今川義元の首を太刀の先きに貫れ織田信長自ら本陣
 を攻破り義元を討取りたり今と誰の爲先に戦ふや早く
 降参して助命を蒙れと聲々に呼りけれ今川勢肝を消
 し魂を失ひ道は如何にせん淺ましやと狼狽騒ぎ右往左往
 小散亂し總敗軍となす小なる
 奇正子曰く勝吉が義元の氣質を推して謀計を設けたる

の孫子の所謂彼れを知るものにして勝吉固より無學な
 れば學問に於て兵法を知らずと雖ども生れながらにし
 て自然兵法に通じ斯くは討りになり又織田明神に於て
 奇謀を顯はしたる計ひあどは能く兵氣を鼓舞するの妙
 を得たるものふえて當時にありては實に奇策と云ふべ
 ま然れども今日に及んで窮理學問を以て最早斯の
 如き事へ用ふべからざるごと、そなりぬれ兵家宜しく
 察せざるべからざる也天公曰く大風甚雨の前を搏ち機
 を擒にする所以なりと桶狭間の役自然此法に當れり
 ○秀吉奇計を運らして箕作城を抜く
 織田信長の江州佐々木六角を攻めんとするや和田山、箕作
 の両城は江州の咽喉首ふして佐々木六角家の頼とする所

なれば先づ此の兩城をだに陥りなむ江州忽ち平定せんと
 て和田山は木下秀吉を以て攻めさせ箕作は明智光秀に攻
 めさせける然るも秀吉も早く謀計を以て和田山を落せし
 め光秀の未だ箕作を落すまじ能はずして空しく日を送り
 ける信長此白を聞き新くて箕作落城延引せば妨げらる
 ると木下秀吉をまて手勢五百餘騎を以て之を助けしむ
 て秀吉打立て光秀の陣小至りたる頃光秀も早や計策を
 定めて大半成就しよる所なりければ光秀申されけるは今
 味方の諸將城兵を驚き出まて取ふて取走せり是れ某が計
 策ふて既小落城の兆を顯せり必ず御心配あるべから
 ずとなり秀吉の此言を聞くより早く其手段を悟り至極妙
 計にて候併し足下手勢少なく計策十分に行ひ難らん某が

勢を合せ此度の大事にて向ひ能く謀計を行ひ給へ光秀其
 詞に従ひ秀吉が勢を合せ都合一千餘人又々城へ攻寄ける
 に城兵大手の門を八文字小押開き打て出で寄手坂井森が
 兵を切立々々勝に乗て追來るも明智が勢入替て戦ひ鐵砲
 をつるべ放ち敵兵を驚して引き揚げさせんと討りけるに
 案の如く城兵共長遣ひして過ちすと鐘を鳴らして引取
 りける此時光秀士卒を令し急に城門へ打寄せ謀計を行
 んとす城兵付入れじと必死になりて防禦をせけれ光秀も
 敢て戦ひを好まず城の四方を取圍も鐵砲を放ち矢を射か
 け城中の變をぞ待居たりなる此時城中固く守り矢石を飛
 して防戦するにぞ光秀の我が謀計既に成りぬ此城今や落
 ちなんと息を詰免て扣へける時木下が兵の内より一人馬

を堀際へ乗出し鞭を揚げて城兵を指招た大音に申しける
 當城既に此方の有に成れり然るを未だ悟らず何を頼み
 に防戦するや早く降参して生命を全ふせよ猶豫するに
 及では城壁共に紛雜にせんと高うかに呼はり同音にドッ
 と笑ふに予城兵の言ふに及ばず味方の勢も亦大に驚き會
 て其故を知らず光秀も怪とながら秀吉我が謀計を推察し
 て此の如く罵詈らしめ城兵を疑はしむる計策あるらんと
 猶豫えて城中を見るに中沼華人と云ふ功の者櫓に登り士
 卒に命し居る所へ一人の大漢子傍より顯れ山で中沼を一
 刀に切殺せしにぞ城中級小鼎の沸が如く騒ぎ立て其れ謀
 反人よと呼る所忽ち五色の吹貫を城中に高く指揚げ木下
 藤吉秀吉築作の城一番乗と銘々小呼りつて蜂窠を始発

稲田、堀尾、加次田が輩三十餘人四方に散りて切廻れば城中上
 を下へと騒ぎ亂れ何れを敵何れを味方と見定め難く右往
 左往ふなりなる之を見て森、坂井、明智が輩スツや進めと
 云ふ程あるがれ一千餘人城門を打破し一同に亂れ入り當
 るを幸ひ切り廻りなるに予城兵今ハ防禦々に備あく本丸
 へ逃歸り必死と成りて戦ふたり光秀は思ひも寄らず秀吉
 に功を奪われ此本丸を攻落させんハ何に面目に人と面を
 合すべきやと勇氣日頃十倍して自ら具先に進んで息を
 も絶す攻めければさしを必死を極めし城兵も大少苦み降
 参の由聲々に呼はりけるに遂に降参を許して我に築作
 平定せし抑も築作の城攻光秀が謀計は城兵を欺た出し偽
 り貸けて能き圖ふ引き付け太軍一處を取て返へし攻上る

時て敵周章て引退くべし其時物馴たる勇士を敵兵に交へ
 城中へ入置き續て急か攻寄るに城中より火を放ち或て主
 將を切殺し城門を開かせ攻入るべき方便なり然れども新
 參と云ひ腹心の郎等も少なく此時城中へ紛れ入りしハ從
 弟彌平治同次郎及び奥田三宅の四人のみにて而かを見顯
 されあんことを恐れて奮忽小手を下し得ず秀吉も光秀と
 謀計は同じけれども兵士の而かを鮮須賀黨の強盜にして
 器し取つたる學得の忍びの達人三十餘人共上る永祿三
 年織田今川桶狭間の合戦の時當國佐々木家より借り受
 し具足武具、袖印までを貯へ置き之を若して城中に入置き
 たるものなれば敵ふ見咎めらるゝの患ひなく三十餘人四
 方に散りて切廻れを城兵ハ之を見察ること能はで遂ふ秀

吉が手ふろ落ちとりける

奇正子曰く味方を敵城に入れて對陣の節主將の首を落
 すの謀計は漢楚及び三國等に屢々ある所のものなれど
 も何れも皆味方の強將をして敵城に偽り降らしめ置く
 の方便なり今明智、木下の計るものは其大體の謀略を之
 れと同一なるも其味方を敵城に入るゝ所以のもの異に
 して頗ぶる妙あり木下は又此謀計を用ふるも善く其人
 其具を以てす實に妙中の妙と云ふべし

○秀吉殿疑兵の謀計を以て大小朝倉勢を破る

織田信長の勢ひ益々盛にして越前の朝倉義景を誅戮せん
 とて先づ越前第一の要害たる手筒ヶ峯、金ヶ崎の兩城を攻
 め僅ふ二日にして既に兩城落ちしかば信長大に悦び斯く

てハ朝倉を誅戮せんこと近きふありと思ふ間もあらで江
 州小谷の城主淺井父子と朝倉と相狭んで信長を討んずと
 の山信長の陣中に聞ゆければ信長諸將を會めて評議に及
 び淺井朝倉兩將ふ挑む討ては此軍難儀なるべし一先歸
 京するの方然るべしと決定し木下秀吉の計ひにて信長の
 旗指物を總勢の中に立て本陣より退き信長の却て旗本の
 勢を引牽し密に間道より去りふける然れと案の如く淺井
 勢信長の旗指物を見て途中ふ喰止て戦ふ隙ふ信長の安々
 と早くも歸京してけり斯て此度の殿ハ木下秀吉と定めた
 れハ秀吉ハ此度の殿隨分共に目懸敷働きをなさんとて
 纒に三千餘人ふて金ヶ崎に止り諸勇士を集會め自ら領を
 轄で申しけるは我れ此所にて朝倉が後結の大軍を引受け

奇代の功を立て味方の諸士が眼を覺まべしとて斥候を出
 して朝倉が軍勢を窺ひしむるに今宵成は刻の此此所に着
 せべしと報じ来る然るハ我が奇計を施すべし義景固より
 柔弱の者なれば味方の形勢を見む獵ふ進まず城外に陣を
 取り長途の勞れを休むべしと云ふて其れより諸將ふ手配
 を命ず先づ城を去るふと十町或ハ十二三町にして宿陣を
 べし是れ兵法に於て大概定まり法命なり義景必ず之れよ
 寄らん味方の兵一千人城より十餘町去て左右に分れて埋
 伏せべし相圖の火を揚げなと出で戦ふべしとて蜂須賀兄
 弟を大將となし命を下せむ小六又十郎の兄弟兵を引て打
 立ちける又堀尾茂助、稻田大炊、青山新七、同小助、長江半之丞
 川口九助、日比野大太夫等五百人の兵を卒し四方の山々谷

々分れ散じ樹木の枝も松明を夥多しく益り付け相圖の
 火を揚げなば一同に其松明に火を付け紙にて旗指物を作
 り置き之を持って火蔭に徘徊ふべし堀尾以下の面々令を受
 け軍卒を引て打立ぬ備て又淺野彌平を召して汝五百人の
 士卒を引連れ金ヶ崎の左右の山所々小箒を焚き大軍陣せ
 し模様をなして敵を疑ひしむべし淺野命を領し之れも亦
 兵を率て打立ちける秀吉の城中に旗指物數多立ち並べ自
 ら一千餘人麓の方に陣を取り旗指物數多立ち並べ自
 並べ今や遅しと待ちかけたも備ても此方の朝倉左衛門督
 義景、淺井父子が内意に由り信長を指挟んで討取んと一族
 朝倉式部大輔景鏡、同中務少輔景恆、前波九兵衛、黒坂備中等
 都合三萬五千餘騎一隊が谷より揉み揉んで敦賀表に予

發向せり時に元龜元年四月廿八日暮過る頃朝倉の先陣遙
 かふ金ヶ崎の形勢を窺ひ見るに暗夜に物の黒白も別から
 ぬぞも城中左右の山々谷々に信長の軍勢夥多しく陣を取
 り箒の光り空天を照し旌旗指物風ふ翻然とひるがへり六
 七方の軍勢屯せりと見えければ備ては信長は未だ退かず
 猶る此所ふありと覺ゆるぞ今宵は茲ふ陣を取ら味方人馬
 の勞れを休むべし明日の必ず信長退くべし其時に追討せ
 んと金ヶ崎より十町許り彼方ふ野陣を搦へ長途の勞れを
 休めける秀吉の朝倉の野陣せしと聞て我が謀計既に成れ
 りと悦び夜半過る頃一千五百人悉く金ヶ崎を發し朝倉が
 陣所ふ至り俄に鯨波を發し鐵砲を響せ具一文字小切り入
 りれば朝倉勢スハ敵の夜討予其れ備へを立て突崩せよ

と中務景恆、士卒を命じて戦ふ所ふ秀吉時分を善しと相圖
 の狼烟を揚げると等しく左右の峯々谷々に埋伏したる木
 下勢一同に闘を作り構へ置きたる松明に悉く火を附けれ
 ば其光り白日の如く幾數十萬の軍勢一時に發りしと見え
 て貝鐘の音山谷ふ響きまさまじき事言ばかりありし朝倉勢
 此體を見て仰天しいとゞきへ寐るびへて戦ふ氣勢もなき
 上に織田勢野に満ち出に襲り一時に向ひしと驚きぬれば
 今の防禦を戦ふ者一人もなく我れ先きに逃け出し主討
 れても臣之を救はず親圍まるれども子之を餘所に見なま
 散々ふなりて敗走す木下勢我れ劣らじと切立る中にも加
 藤虎之助、福島市松、片桐祐作等の群る敵を薙廻るに予朝倉
 勢討るゝ者數を知らず血の流れて川を成し屍の積んで岡

の如し然れども朝倉景鏡、同景恆、前波、黒坂が輩物馴れたる
 勇士なれば味方を令し夜討を極めて小勢ある者なるを心
 をしづめ敵を防禦ぎ同士討ちまて味方を損すなど呼はま
 く蒐廻れど大勢の崩れ立たる習なれば勇氣ある輩も働
 く事心に任せず右に漂ひ左に泥み四度路に成て備へも立
 てず時ふ後陣の方に火の手を揚げ俄ふ闘の聲山谷を鳴し
 木下が勇將蜂須賀兄弟一千餘人左右ふ分れて本陣を切崩
 せば大將義景大に驚死馬ふ鞭打て逃出きに予今の防禦ん
 とする者一人もなく總敗軍となりて思ひく心々に落行
 きぬる木下勢二千五百人前後より押狭み當るを幸ひに切
 崩し二里許進んで引返せば夜ハ薄明と明け渡る此戦ハ朝
 倉勢を討つると八千餘人木下勢凱歌を揚げ敵の捨てたる

馬物具拾ひ集免是れあん越前の土産なると勇と悦んで不引退けり

奇正子曰く秀吉固より無學にして學問上兵法に通せざれども此の謀計の孔明、楠、真田等の施せる計畧よさも似たり是れ生れながりにして自然兵法を知るものならん實に奇と云ふべし

○秀吉、奇計を以て鯨江城を襲取る

木下秀吉、長濱ふ在城せし時佐々木入道承禎長光寺の城を取圍み氷の手を断切り攻るまじ甚ぶ急なりと聞け及びたれども城將の名ふ一雄鬼を欺く柴田勝家のことなれば承禎如何小攻るとも容易くハ落城せまじ然らば長光寺に後詰せんよと率る此隙に承禎が本城鯨江を攻るの方良計あり

らん彼れ承禎此由を聞かば必ず本城に取て返をべし然らば長光寺の圍みも自ら解け勝家も命全く兩全の謀計なりとて長濱の農民百餘人に兵士の勇壯ある者五十餘人交へ其人々ふて去る永祿三年桶狭間の役佐々木家より借り受たる武器を着せ計策を教へ鯨江の城へ到らしめ其跡より加藤、福島等の勇兵一千餘人忍びやかに打立しむ是れ實に元龜元年六月三日の事なり時に鯨江城ふハ鯨江相摸守高瀬刑部兩大將にて一千餘人承禎の留守を護り居たりけるが暮れ過る頃城外小人音竊く長光寺の陣所より大將の命を受け参り候程ふ早く城門を開かれ候へと呼はりけるにぞ高瀬刑部急ぎ櫓に上り見下せば農民と見えて手に松明を燈し二百人許小具足着たる兵士五六騎堀際に立て大

音に申しけるハ長光寺の城の水の手を断切りし程ふ城中
 甚だ困窮り今日降参の由を申すにより人質として農民等
 二百人請取ぬれど猶ほ實否分明ならぬを今宵先づ當城へ
 入置き明早朝に長光寺の落去に由り如何よとも計ふべし
 との御事なれば先づ此人質を城中へ入れられ候へと申し
 されバ刑部松明の光りに能く觀れを一揆の農民小相違な
 く且つ又附添の兵士は管佐々木家の常紋うつたる武器を
 着されを更に疑ふとなく城門を開き人質を受取んとす
 此時農民の中小交り居たる木下が郎等城門ふ到るや否や
 聲を掛けす城兵を七八人切倒し一同小城に籠入り俄に
 門を作り東西ふ切て廻れば城中不意の事なれを誰の防禦
 ぎ戦ふ者もなく周章廻りて騒動する所へ又木下が勇兵一

千餘人が加藤、福島等銘々續て馳來り四方八方に蒐巡り騒
 ぎ立たる城兵を片端より切りまくれば大將鯨江、高瀬等も
 防禦すべき思案も出でず途を失ふて逃げまよひ城門を
 開きたるを幸ひに這々遁れて逃げ出るを木下勢と逃ぐる
 敵を討つこと勿れ只城外へ遁出せとて向ふ者ハ切て捨て
 逃げと案て置ねど蒐散せば城兵等我れ先きと争ふて城門
 を出て長光寺の陣所へと走りければ僅ふ半時許りに何の
 苦もなく鯨江城を乗取りけり
 奇正子曰く佐々木家に於ては一たび木下に武器を借し
 たるが因果之れが病を就きとあり其武器を種に屢々手
 品を遣はるよは是非もなき次第なりと雖も既に既に
 に於て其武器の手品を遣はれてあれば此度ハ茲に注意

して氣を付けねどもならぬことなれども主將の居らざる
 むとなれば又侯秀吉の爲め手品を遣はれしなり桶狭間
 の役佐々木ふたて軍兵を借さず武器を借しよること秀
 吉の爲先にも後の幸ひとこそなりつれ嗚呼世の成行き
 の何が幸となりて何が不幸となるか容易く測り知るべ
 かりず實に案外の世界と云ふべし

◎第十六章 小早川隆景

○景隆、背備を以て大に明軍を破る

文祿朝鮮征討の役明國は隣國にして殊に平常朝鮮を屬國
 同様に爲し居ることなれば今度の危難を聞き唇破れて齒
 冷し先づ其唇を破らさまじきこと肝要なれとて李如松と
 云ふ者を大將とし二十餘萬の大軍を引率して朝鮮國の加

勢に來り先づ小西、宗、大谷、増田等の精銳りし平壤を取圍み
 てゑいゝ聲してひしゝと攻立けるも日本勢とても
 叶はじとや思ひけん夜にまぎれて王城小逃去にける此時
 小早川隆景は開城府の要害に精銳り明の大軍到りなば烈
 しき戦ひをさし敵味方の目を覺させ呉れんずとて手配嚴
 重にして今や遲しと待ちかけたり王城ふと浮田秀家、小西
 等が敗軍を見て大に驚き黒田長政、久留米秀兼、小早川隆景
 なんどが警へ人を走らせ明兵大軍にて押來る由早々王城
 に勢を引集め計議をさし戦ひ候へと申送りけるに黒田久
 留米等は早速馳來ると雖ども小早川一人曾て之れに同心
 せず我れ此地に渡海せし始めあり命生て日本へ歸らんと
 は覺えず今明の大軍に逢ふて鋒より火を出し太刀の目釘

の積んずらん限りは戦ふて戰場に屍を拜さんこそ我が老
 後の思ひ出でなり然るを何ぞ大軍に聞きをぞして未だ敵
 の旌旗一洗をも見ずして退くべきと思ひも寄らぬこと
 ならめとて引かん氣色更になし石田、増田等亦取る所あ
 り斯くてこそ小早川を始め味方の諸將危殆き合戦に及ぶべ
 し在て此所へ報くべしとて大谷吉隆を以て隆景に説かし
 め漸くにして引取らんことにはせしが此後の合戦小隆景
 先鋒の事承知あつば引取らん然なくば引取申さずと云ふ
 に予吉隆然るを拙者足下先鋒の體人とならんとして王城小
 ぞ退きける隆景は人小先きをせられじと南大門の外騎踏
 館に屯をすへき敵の來るを待ちかけたり然るに明の將軍
 李如松は大軍を引卒し日本勢の跡をしたひ小早川の啓た

る開城府に着し爰に暫く人馬の足を休め翌日王城に程も
 近き坡州と云ふ所まで押出だしぬ日本の諸將之を聞て軍
 議區々ありしが浮田、石田を始め其餘の諸將も大軍を引受
 けては野合の合戦危殆ふかるべし總軍王城小精籠り矢石
 を備へて戦ふべしと議せられけるを立花宗繁大の眼を瞞
 し刀の柄に手を掛け敵剛ければとて逃籠るやうや候唯馳
 めわせて蹴散して捨てるものと大音に呼はりけれ人
 々之れに勵まされ然らざるを先鋒に進むべしと云ふに
 ぞ隆景聲を勵まし此度の合戦に於てハ某先鋒に進むへし
 と兼ねてよとつる事と誰人にもあれ先陣は思ひも寄ら
 ずとて馳て我が陣中に走入り軍勢の手配陣備等に及びけ
 る先手は小早川が勇士栗屋四郎兵衛、村上彈正、野島掃部三

千餘人立花宗茂、久留米秀兼、毛利元康八千餘人の勢にて右
 の方三丁計に陣を取りて奇兵を爲す本陣は隆景一萬三千
 餘人旗旗の色粲然として人馬猛く勇み立ちけるは實に關
 西の一人武勇の大將よと見えにける翌れを文祿二年正月
 二十六日未だ東雲の朝霞を拂ひ明の大軍黒みかゝつて其
 間僅かに一里許(三十六丁一里)に押寄せたり此時隆景味方
 の軍勢を後向に立せ敵の勢を見ると勿れと令しなれば
 總軍皆敵の方を後にして備へける是れは明兵目も餘る大
 軍なれを味方の兵士戦はざる先きよ心懸し見崩れをやす
 べたるとの將略あり時に士大將野田主膳と言ふ者燒飯十
 斗り木の葉に盛り隆景の前に來り早や敵合近くあり候間
 し召れ候とんやと差出せむ隆景取て五ッ食し彼の士大將

野田我れも相伴仕らんとて二ッ取て食ひ其餘りを近習の
 武士小與へけれども一ッを得食て止みにたり誠に大軍前
 にありて手誥の合戦に及ぶ時ハ抜群の英雄あらでハ食事
 あさハ叶ふまじと之を見て諸人感心しけるも道理なれ時
 小黒田長政歩卒六七人引具し隆景の旗本に來り天晴御陣
 押見事に候もの哉餘りの浦山しぎに唯一人参りて候何方
 にも手傳ひあ申すべしと言ふふと隆景大に悦び善くこ
 う参られて候へ然らば先手に進みし栗屋に力を添へ給へ
 と聞けければ長政滿面小喜色を顯し承り候とて先陣へ向
 へれける時に李如松が先鋒の大將香大受朝鮮の大將高彦
 伯等數萬の軍兵近々と進み寄れを隆景急小後向とる味
 方よ令して正面小向のセドツと鯨波を作と數百の鐵砲一